

## 新しい世紀によせて

--- 近現代史教育の欠落を防ぎ、近現代史教育を充実させよう ---  
(その 1)

諏訪兼位

### 1. はじめに

新しい世紀が訪れた。私達は 20 世紀におこったもろもろのことどもを深く考察し、深く反省し、それらをふまえて、21 世紀に歩むべき道程を展望せねばならない。しかし、日本では、近現代史教育が欠落し、歴史の真実を見きわめる洞察力も欠落しているように思えてならない。近現代史教育の欠落は、日本人の視野をせまくし、洞察力を減退させ、展望力を消失させている。最近の歴史教科書問題や靖国神社公式参拝問題などは、基本的には、近現代史教育の欠落に起因しているといっても過言ではない。

まずふたつのエピソードを紹介したい。

#### A. 太平洋戦争についての私の講義

1995 年 4 月に本学の情報社会科学部が発足し、真新しい第 1 期生が半田キャンパスに入学してきた。私は「自然認識論」を講義することになった。自然認識の哲学的課題を説くのではなく、自然現象を如何に把握し理解すべきであるかを、具体的事例に則してわかりやすく講義することにした。

たとえば「阪神大震災に学ぶ」というテーマで話した時は、3ヶ月前におこった大地震の話だったので、学生達はとても熱心に聴いた。私は阪神大震災の具体的な状況を話し、地震の原因を話し、自然災害だったが、単なる自然現象ではなく、大きな社会災害だったことを述べ、自然と社会との結びつきを考えるべきだと力説した。学生達からは沢山の質問が出た。

また、「自然の破壊者：戦争」というテーマで話した時は、地球環境の強大な破壊者であった太平洋戦争を取上げて、次の 12 の項目について具体的に述べた。(1)戦争の直接の原因、(2)開戦への道、(3)戦争の目的、(4)戦争の経過、(5)天皇制ファシズムの確立と崩壊、(6)経済と国民生

活の状況、(7) 文化と教育に対する統制、(8) 戦時下の抵抗運動、(9) 植民地と占領地の状況、(10) 戦争の終結、(11) 戦争の性格と人的被害、(12) 戦争責任問題である。学生達はとても熱心に聴いた。

1996 年以降になると、美浜キャンパスで、「地球と環境」を講義することになった。美浜キャンパスでは、社会福祉学部を主体に、経済学部の学生達も、私の講義をきいた。部の学生を中心に夜間の講義をした年と、部の学生を中心に、昼間の講義をした年とがある。いずれも後期だけの授業であり、通年の「自然認識論」の授業の半分のテーマで話すこととなった。しかし、阪神大震災のテーマと太平洋戦争のテーマは、美浜キャンパスでも取り上げて講義した。

半田キャンパスでも美浜キャンパスでも学生達の反応は似ていた。「小・中・高校時代、太平洋戦争についてちゃんと授業できいたことはなかった。大学にはいって、「自然認識論」(または「地球と環境」)の講義ではじめて、太平洋戦争のシステムティックな話をきくことができた。」という反応であった。私は、日本において近現代史教育が欠落していることに、強い衝撃をうけた。

#### B. 日中関係の近現代史の理解度——中国の中学生と日本の高校生をくらべて——

かの 731 部隊 (関東軍防疫給水本部) は、戦争中、埼玉県東部 (春日部市、庄和町、杉戸町など) のネズミ飼育農家 6,000 戸から 1 ヶ月 4 万匹ないし 5 万匹のネズミを買い付けていた。ネズミの半数以上は、731 部隊の専用機で、立川飛行場から平房の 731 部隊本部に送られた。これらのネズミはペストネズミとなり、血を吸わせてペストノミが製造され、「石井式陶磁器製爆弾」につめこまれ、投下され、ペストを流行させたことは衆知のことである。

1997 年の夏、庄和高校地歴部員と庄和町の市民は、満州 (中国東北部) の瀋陽とハルビンを旅し、中国の中・高校生と共に、「戦争と平和」をめぐるシンポジウムを開いた。この旅行の前に、中国の中学生と日本の高校生に、日中関係の近現代史をどう理解しているかという共通のアンケートが実施された。

満州国皇帝溥儀<sup>フキ</sup>について、中国の生徒は 97% が知っているのに、日本の生徒はわずか 5% だけしか知らない。石井四郎について、中国の生徒は 82% が知っているのに、日本の生徒は 5% だけしか知らない。満州事変 (9・18 事変) について、中国の生徒は 98% がよく知っているのに、日本の生徒は 24% だけがよく知っていると言った。日華事変 (日中戦争) について、中国の生徒は 97% がよく知っているのに、日本の生徒はわずか 2% がよく知っていると言ったに過ぎない。731 部隊について、中国の生徒は 100% がよく知っているのに、日本の生徒はわずか 12% がよく知っていると言ったに過ぎない。

このアンケート結果をみて、坂本龍彦氏 (1998) は、日本での近現代史教育が欠落していることを大変嘆いている。戦争中から戦争直後 (1942 年 ~ 1946 年) の数年間の少年時代を満州で過ごし、難民だった坂本氏は、より良い未来をつくるために、自分達の歴史の真実を見きわめる必要性を説き、とくに隣国だった朝鮮や中国とのかかわりを、知識だけではなく、実際に見、直接聞

き、お互いに話すことでつかむべきだと力説している。

私は、本稿（その1）で、朝鮮のこと、満州のこと、中国のことを述べたいと思う。そして次稿（その2）で、日本について述べたいと思う。日本については、太平洋戦争に従軍して犠牲になった人々や生き残った人々、また学徒動員中に犠牲になった人々について述べようと思う。いずれも私と同年輩かわずかに年輩の人々である。次稿（その2）では最後に、敗戦（1945年）当時の日本についても述べようと思う。

## 2. 朝鮮

朝鮮については主に、梶村秀樹氏の著書（1977）と高崎宗司氏の著書（1993）を参照した。

- (1) 朝鮮の基層文化は中国のそれとはまったく異質であり、朝鮮は決して単なる中国文化の日本への伝播の通路ではない。言語に関しても、朝鮮語は中国語とはまったく別のウラル・アルタイ語族に属し、トルコ語・モンゴル語・満州語・日本語などと同系統である。

今日の朝鮮民族の先祖たちの太古における生活圏は、単に朝鮮半島だけではなく、中国東北（満州）からロシア沿海州にかけての広大な森林地帯におよんでいた。彼等の生活は、広大な森林をおそらく移動しながらの、狩猟・漁撈・採取生活であった。この森林狩猟文化圏は、西隣のモンゴル・トルコ族等の草原遊牧文化圏とも、はっきり異なる特徴をもっている。実際、朝鮮民族の基層文化は、この豪快な生活様式のなかで育まれたものを、近代民族の中で最も濃厚に継承しているといえよう。

森林狩猟文化圏の中で、朝鮮民族と満州民族が分岐していく決定的契機は、農業生産の開始と関連しているように思われる。より農業に適した自然条件を求めて、この文化圏内での、北方から朝鮮半島部への人々の波動的な移動がみられる。移動して農業生活に定着していった部分が、次第に今日の朝鮮民族を形成し、一方北方で伝統的生活様式にとどまった部分が、満州民族＝女真を形成していった。農耕文化に移行した朝鮮民族の政治的統合は、統一新羅（7世紀）の時代に一応完了する。

- (2) 阿片戦争で中国を屈服させ、また日本を開港させて以後、1860年代にはいって、侵略的意図を秘めた開国要求をもって、北からロシア、東からアメリカ、南からイギリスとフランスの侵略船が朝鮮にしきりにやってきた。大院君（1820 - 1898）は武力を用いて、侵略を撃退する方針をとった。1866年にアメリカ船を平壤付近で焼き払い、同年、フランス艦隊を江華島で撃退した。1871年には、アメリカ艦隊を江華島で撃退した。これらの侵略の撃退は、空洞化していた正規の軍事機構ではなく、実質的には中間的商人層の正当防衛行為であった。

欧米諸国は、しばらく朝鮮侵略をあきらめた。

- (3) 吉田松陰は、きわめて意識的・露骨にアジア侵略を主張した。その弟子達——明治維新の遂

行者たち—— は、朝鮮・台湾などで、松陰の思想を忠実に実行に移していった。明治政府は発足当初から、征韓戦略を確定させていた。西郷・板垣らと木戸・大久保らとの対立は、征韓を何時実行するかをめぐるもので、双方とも侵略自体を否定してはいなかった。

朝鮮の開国は、日本の明治政府が、わずか 20 余年前に欧米諸国に強要されたのと同じ手法と目的をもって、強要したものである。

なお、福沢諭吉も 1885 年に「脱亜論」を書いて、露骨に侵略主義を唱えた。

- (4) 1873 年の、閔氏一族による、朝鮮の王朝権力の大院君からの奪取の機に乗じ、明治政府は 1875 年 9 月、計画的に雲揚号事件をおこし、武力挑発した。こうして、1876 年 2 月に、日朝修好条規（江華条約）が締結された。朝鮮にとって最初の開国条約であった。居留民の治外法権、無関税条項や日本貨幣通用容認条項など、日本商人の掠奪的貿易に道を開くものとなった。産金国である朝鮮の金が、国際価格よりはるかに安価に日本に搬出された。これが日本の金本位制確立の基礎となった。

- (5) 1876 年の開国によって、外来の高級綿布が流入し、都市の貧民層の手工業労働の場を奪った。一方、穀物の搬出は米の価格を騰貴させた。日本が軍制改編に介入したことによって、下層兵士への俸禄米が 13 ヶ月も遅配した。こうして、1882 年に「壬午の軍人反乱」がおこり、閔氏政権を崩壊させ、大院君を推戴した。

直ちに、清国と日本が介入した。清国軍はソウルを占領し、閔氏政権を復活させて大院君を拉致した。日本は閔氏政権から賠償金を取り、清国と同様の常時駐兵権を認めさせた。

1884 年 12 月に金 玉均（1851 - 1893）らによる「甲申政変」がおこり、国王を確保して新政権を樹立した。直ちに清国軍は介入し、新政権を崩壊させて、再び閔氏政権を復活させた。

- (6) 1890 年頃から、日本商人は日本製の小幅木綿を持込んだ。このため、富農小商品生産者と貧農労働力販売者の生活は圧迫された。日本への米・大豆の大量搬出は、都市貧民と農村 貧・雇農層の生活に打撃を及ぼした。こうして、1894 年～95 年の「甲午農民戦争」がおこった。これは地域の枠をこえた全国的農民抗争に転化していった。当時、農民の間に広く浸透していた東学教団の役割は大きい。東学は 1860 年に開教され、西学（キリスト教）に対抗しようとする、謀反の雰囲気の中で生まれた新宗教である。

破竹の勢いの農民軍は政府軍を撃破した。閔氏政権は清国に援軍を求め、清国は直ちに応じ、日本軍も派兵を開始した。

この状況の急転の下、農民軍は閔氏政権と交渉し、「全州和約」を成立させた。これによって農民軍の存在が合法化され、争乱状態はなくなった。清国軍・日本軍の出兵の口実はなくなった。

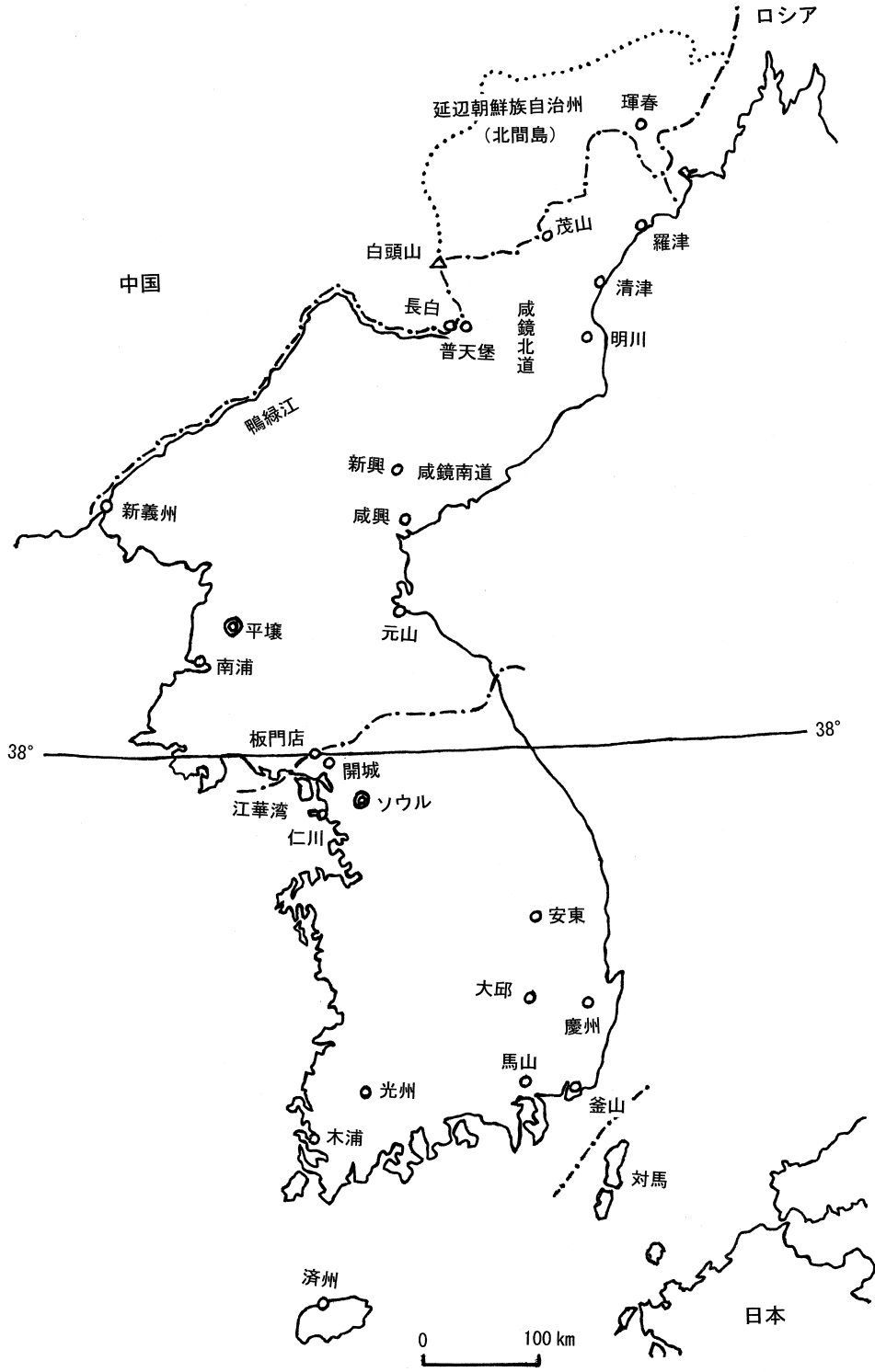


図1 朝鮮

(7) 日本はこの時、清国と共同して朝鮮の「内政改革」にあたることを提議した。清国は、朝鮮の主権を侵害するとして、日本の提案を拒否した。日本はこの拒否を口実として、清国軍に奇襲攻撃をかけ、日清間の戦端を開いた。これが 1894 年の日清戦争である。日本は 1894 年 7 月ソウルを占領して閔氏政権を転覆させ、金弘集 (1842 - 1896) らの政権を発足させた。日清間の戦局は、清国側に準備も戦意もなかったため、日本軍が勝利した。つづいて日本軍は、農民軍攻撃に主力をさしむけた。1895 年の初頭、農民軍の指導者全捧準は捕えられ処刑された。

(8) 日清戦争後、日本は戦勝の余勢をかって、高飛車な要求をつきつけた。1895 年 10 月、三浦梧楼公使の直接指導のもと、駐留軍人と大陸浪人を動員して王宮に押し入り、閔妃を虐殺した。当時閔妃は一国の国家元首の正夫人の地位にあった。

この事件は、朝鮮官民の怒りを激発させた。孤立した日本は、朝鮮の主権への強引な介入を、しばらく差し控えざるをえなかった。かわってロシアが、介入の意図を露骨にしてきた。こうして、日本・ロシア両国が、朝鮮侵略をめぐる覇権を争うことになった。

(9) 1895 ~ 96 年、日本勢力の駆逐、金弘集政権の打倒をめざして、「初期義兵」が蜂起した。初期義兵の勢力は、1896 年の初めに最大となり、ソウルでは宮廷クーデターが起こされ、金弘集政権は崩壊した。高宗王はロシア公使館に入り、1 年あまりそこで国務を執った。国王にとって宮廷が、安全な場所ではなくなっていた。

徐戴弼 (1863 - 1951) らは、1896 年「独立新聞」を発刊し、「独立協会」を組織した。民衆自身の力による独立した近代国家の建設を目標とした。国王に皇帝の称号を奉り、国号を大韓帝国と改めるなどの影響を時の政権に与えた。1898 年には、急迫するロシアの利権奪取と、内政介入の拒否に力を盡したが、同年末に解体されてしまった。

(10) 1894 年以前には、富農小商品生産者の土布生産は健在であったが、日清戦争後、日本の機械製綿布の流入で、苦しい価格競争を強いられた。日本商人は内陸に定着して、高利貸活動を盛んに行なうようになり、行政の乱れを利用して、非合法であるのに、事実上の土地所有者にさえ転化していった。

1899 年、ロシアが馬山浦租借を密かに企画したとき、その情報をキャッチした陸軍参謀本部の意をうけ、その資金提供をうけて、自己名義で租借予定地を買いまくり、ロシアの企図を挫折させた。釜山商人 迫間房太郎はその典型例である。

こうした日本商人の無法さに対する民衆の怒りは、多くの散発的な反侵略抗争を多発させた。1902 年には日本は、朝鮮の通貨として機能する第一銀行券の発行を、朝鮮政府に認めさせた。1904 年、朝鮮は日本の生命線なりと称して、ロシアに戦争をしかけるにいたった。

(11) 中立を宣言していた朝鮮政府の意志をふみにじり、日本は朝鮮に兵を進め、1904 年 2 月

「日韓議定書」を強要した。日本軍の朝鮮での行動と基地設置を認めさせ、内政介入を法的に裏付けるためのものであった。

戦線が朝鮮から満州に移るにつれ、日本は保護国の形態で朝鮮を支配下におくために、1904年8月、「第1次日韓協約」を強要し、朝鮮政府内の枢要な部署に日本人顧問を送りこんで、実権を掌握させた。朝鮮の貨幣体系を日本のそれに従属させ、日本人の土地所有を合法化した。朝鮮人民を動員して、にわか幹線鉄道が軍用として敷設されていった。

- (12) 日露戦争後、日本は英・米の支持をとりつけたうえで、朝鮮に保護条約を強要した。1905年11月の「乙巳保護条約（第2次日韓協約）」である。朝鮮の外交権を日本が奪取して、欧米との直接接触を絶ち、従来の内政干渉を確認するとともに、「顧問」等を統括する日本の機関として「統監府」を新設し、その長である「統監」は朝鮮皇帝への「拜謁権（皇帝に直接会って要求をつきつける権利）」をもつというものであった。この保護国・間接統治体制は、名目的には朝鮮の主権が残るが、実質的には植民地支配とかわりがない。

この条約交渉の特命全権大使 伊藤博文は、11月17日駐屯日本軍に王宮を包囲させたうえで、直接朝鮮政府の閣議の席に乗り込み、大臣一人一人に脅迫的に賛否を答えさせ、5対2の多数決によって「乙巳保護条約」は可決したものと認めてしまった。

しかし、高宗はこれを批准しなかった。調印書には皇帝の玉璽や内閣総理大臣の副署はない。当時、朝鮮の有識者の間では、高宗が保護条約を批准しなかったこと、したがって条約は無効であるということは、広く知られていたらしい。朝鮮民衆の意志にかまわず、日本は保護条約を実行に移した。1906年3月伊藤博文は初代韓国統監として赴任し、完全植民地化へ向けての采配をふるった。

- (13) 1905年11月20日の「皇城新聞」は、宮廷内での「保護条約」強要の真相を発表した。日本人顧問の制圧下にあった朝鮮政府は、ただちに「皇城新聞」を廃刊させた。ソウル市内から朝鮮全土までが憤激のるつぼと化し、蜂起する者が各地に続出した。朝鮮民族を構成する全階級が抗日の闘争に立ち上った。

1907年、大韓帝国皇帝の高宗は、ハーグで開かれていた第2回万国平和会議に密使を派遣して、列国に日本の大韓帝国支配の実情を訴えさせようとした。それが口実となって、「第3次日韓協約」が結ばれ、高宗は日本によって退位を強制された。また大韓帝国の軍隊が強制的に解散させられた。言論・集会・出版の自由が蹂躪され、司法権と警察権も奪われた。

軍隊が解散されると、多くの将校・兵士は、武器を手にしたまま義兵の隊列にはせ参じ、1907年・1908年には、義兵闘争はピークに達した。

- (14) 1909年10月ハルビン駅頭で、植民地化推進の中心人物 伊藤博文は安重根（1879 - 1910）によって暗殺された。安重根は法廷で諄々と日朝中三国の連携の意義を説き、日本国民の反

省を促がした。彼は 1910 年 2 月の最終陳述で、1905 年 11 月の保護条約について次のように述べている。「保護条約ノ事デアリマス 彼ノ条約ハ皇室初メ韓国一般ハ保護ヲ希望シタノデアリマセヌ……皇帝ノ玉璽ヤ総理大臣ノ副署ハアリマセヌ」と。

- (15) 日本は反省することなく、義兵を鎮圧しては、憲兵を残して行政を掌握させる軍政地域を拡げていった。そして、1910 年 8 月 22 日、「日韓併合」条約によって、大韓帝国を地上から消滅させ、形式上も完全な植民地にしてしまった。統監兼朝鮮軍司令官の寺内正毅が、朝鮮総督府の初代総督に就任した。

植民地統治の初期 10 年間は憲兵政治とよばれる。郡ごとに常駐した憲兵が警察官を兼ね、広汎な行政権から即決裁判権まで行使した。「同化主義」を唱えながら、朝鮮民族のいかなる部分にも、権力を分与しなかった。朝鮮人の自主的な社会活動を、宗教を除いて一切禁じ、朝鮮人による新聞・雑誌の発行を認めなかった。近代的自営小農民の土地所有を圧迫制限し、日本人の大土地所有を創出した。総督府自体が、旧王室の封建所有地をそのまま継承して、最大の地主となった。

義兵は、1910 年以降もなお散発的抗争を続けたが、次第に国内の活動の場を失っていった。持久戦を闘うために、国境を越えて満州の間島地方とシベリア一帯に移動した。

- (16) 第 1 次大戦後の国際情勢の流動化のなかで、アメリカ大統領ウィルソンの民族自決宣言が行われた。これは朝鮮民族の独立をも、約束するものであるかにみえた。朝鮮の民族運動の指導者たちは、キリスト教や天道教（東学の後身）の宗教指導者たちと連絡をとり、1919 年 3 月 1 日、高宗王の葬儀を機会として、民族代表 33 名による独立宣言文を配布し、3・1 運動のきっかけを開いた。およそ 1 年間朝鮮全土をおおった 3・1 運動は、多くの人々の独立への意志が、ひとつに合流した民衆運動であった。参加人員は延べ数百万人、実質的には当時 2,000 万の全朝鮮人が、主体的に運動にかかわったといっても過言ではない。

当初日本官憲はたかをくくっていたが、次第に恐怖にかられ、4 月初め以降、日本から軍隊を増派し、弾圧を加えた。上海には亡命政権としての「大韓民国臨時政府」が樹立された。朝鮮民衆の目はベルサイユ会議に注がれていた。ところが、ベルサイユ会議は、アジア諸民族の意志をまったく無視し、第 1 次大戦戦勝国間の縄ばりの再分割に終った。

- (17) 直接行動を重視する心情も生れてきた。1919 年新総督 齊藤 実 は爆弾を投げつけられて負傷した。義兵の系譜を継いで満州・シベリアに根據地をすえていた独立軍は、満州の奥地に軍官学校を設け、正規軍の隊列を編成し、日本軍のシベリア出兵以後、ソ連側に立って日本と戦った。1920 年 8 月青山里の戦闘では、中隊規模の日本軍を袋小路に追いつめて全滅させた。日本はソ連と朝鮮民族革命をめざす独立軍との結合に、極度に神経をとがらせた。日本は 1920 年 10 月瑯春事件をおこし、大軍を満州に不法侵入させ、独立軍と移住朝鮮農民に大打撃を与



えた。

しかし一方、直接行動にあまり意義を認めず、3・1運動の成果として拡大された国内合法活動の領域を利用し、多様な社会運動・文化活動を展開し、独立運動の基盤をより厚くしようとする動きもあった。総督府が安全弁として認めた朝鮮語合法紙の「東亜日報」や「朝鮮日報」などは、これらの運動の宣伝機関の役割をになった。しかし、この運動は民族改良主義のレッテルをはられ、民衆の大きな反発を買った。

米騒動の経験にかんがみ、日本での低米価と安定供給のため、総督府は産米増殖計画を立案し推進した。

- (18) 1923年9月1日関東大震災が発生した。日本の官憲は「朝鮮人が暴動を起こした」というデマを意識的に流し、軍隊・警察・自警団が、朝鮮人を無差別に虐殺してしまった。虐殺された朝鮮人の数は、6,600余人にも達した。当時、日本には約8万人の朝鮮人が住んでいたから、如何に多くの人々が虐殺されたかがわかる。

1995年1月17日の阪神大震災の折は、朝鮮人虐殺などのいまわしい事件は一切おこらなかった。当然のことである。しかし、在日朝鮮人の人々は心のどこかで心配していた。関東大震災の傷痕の深さを物語るものである。

- (19) 1926年6月10日、李朝最後の国王 純宗 (1874 - 1926) の葬儀に際して、第2の3・1運動を起こす動きがあったが、未然に弾圧された。1927年2月には、非妥協的な反日組織である、新幹会が発足した。1928年末から29年にかけて、3ヶ月もつづく「元山ゼネスト」がおこった。1929年末から30年にかけておこった光州学生運動には、全朝鮮の194校、5万余名が参加した。1930年には、釜山紡績工場スト・新興炭坑スト・平壤ゴム工場ストなど、激烈なストライキが続発した。

1929年の大恐慌のため、在朝鮮の工場で生産調整が実施され、在日朝鮮人労働者の強制送還が行われた。産米増殖計画は停止され、米価は惨落し、小農は借金のかたに土地を奪われた。日本は恐慌からの活路を、中国への軍事侵略の拡大に求め、朝鮮を兵站基地として急速に軍需工業化しつつ、「満州事変」をひきおこしていった。

農民組合運動は、強固な大衆運動として、満州事変以後も、1930年代後半まで大きく発展していった。とくに咸鏡道一帯の諸郡の農民組合は、数百名規模の大検挙を何回も受けても、その都度再建されるほど強固な基盤をもっていた。咸鏡北道明川郡などでは、二重権力といえる状況があった。表面的には日本の統治がゆきとどいているようにみえるなかで、ひそかに解放区が創り出されていた。

また、在満朝鮮人社会主義者による抗日パルチザン闘争は、満州事変・満州国成立直後の1932年春、それへの抗争として開始された。そして1930年代末まで、日本の朝鮮統治をおびやかす最も主要な力量に成長していった。満州には、故郷を追われて移住した100万にのぼる

朝鮮人農民がおり、満州のなかでも朝鮮に近い間島地方が、対日実力抗争の主要な舞台となってきた。1933年には、間島地方の山間地帯に小規模ながら7つの解放区が成立した。

(20) 1934年～35年の日本軍の大討伐によって、解放区は放棄せざるをえなかった。金日成(1912-1994)は、朝鮮人パルチザン部隊を率いて各地を転戦したすえ、朝鮮国境に最も近い長白山に遊撃根拠地を設定しなおし、1936年5月に、祖国光復会を結成した。金日成は、パルチザン部隊を朝鮮国内に進出させる、大胆な作戦を敢行した。とくに、1937年6月の普天堡の戦闘、1939年5月の茂山の戦闘は、朝鮮国内にも報道され、民衆に深い印象を刻みつけた。

(21) 満州事変下の宇垣一成総督の時期は、皇民化政策の布石をしいた時期であった。農民を農民組合から引き離すために、農村振興運動を実施し、1934年に農地令を制定し、地主の恣意を制限し、富農・篤農家層までをとりこんだ。

満州事変の直接のきっかけのひとつとされる、1931年の万宝山事件は、中国農民の生活圏内に、日本が朝鮮農民を無理やり割り込ませて、衝突を挑発した事件である。何も知らない朝鮮農民は、土地への渴望から募集に応じたのだった。

満州国では朝鮮人に、日本人につぐ支配的地位を与えるかのごとき煽動が行なわれた。実際、不遇な朝鮮人インテリを、行政官や軍人に登用したりした。満州の日本化のための農業移民計画も、その大部分が朝鮮農民の動員によってみたされた。結果的に、朝鮮民衆を、抗日パルチザンと対決する最先端に、無理やり押し出すこととなった。

(22) 1937年7月に日中戦争がはじまると、皇民化政策はつぎつぎに強行されていった。1937年10月朝鮮総督府は、「皇国臣民の誓詞」を制定した。すでに2年前から各学校に神社参拝を強制していたが、毎朝の朝礼で「天皇陛下に忠義を盡します」といった内容の「皇国民の誓詞」を唱えさせ、ついにはみそぎまでさせた。1938年2月には、朝鮮陸軍特別志願兵令が公布された。ひきつづいて38年3月には、朝鮮教育令を改正して、朝鮮語教育を全廃した。1939年9月には、朝鮮人労働者の集団募集がはじまった。強制連行の開始である。そして1940年2月、総督府は「創氏改名」制度をつくって、朝鮮人に日本式の姓名を名乗ることを強要した。

朝鮮人の日本への強制連行は、1939年の集団募集に始まり、1944年9月の国民徴用令の適用まで、形式的にはいくつかに分けられる。しかし、実質的にはすべて強制であった。動員人数が天下りの的に割り当てられ、吏員が膝詰め談判にきたり、田畑で働いている農夫を捕えて、行き先も告げずトラックに乗せて連行した。1941年12月に太平洋戦争が開始され、日本の青年の徴兵によって生じた労働力の不足を、朝鮮人の強制連行によって埋め合わせたのである。日本各地の炭坑・鉱山・工場、発電所・鉄道・道路建設、軍港や飛行場の周辺まで、およそ重労働の現場で、朝鮮人の姿を見なかったところはひとつもなかった。1930年から1945年8月15日までの15年間に、在日朝鮮人人口は約10倍に急増し、敗戦の時点で、二百数十万人に

達していた。当時の朝鮮の総人口の1割にのぼる。日本への連行が強制連行のすべてではなかった。朝鮮内の工場や軍事施設への徴用はもっと多かった。満州と中国本土というまでもなく、北はアッツ島から南は南太平洋まで、またフィリピンからビルマまで、朝鮮人の姿をみない所はなかった。

1944年8月に、総督府は女子挺身勤労令を公布した。なかには、うら若い女性をだまして慰安婦として戦場に連れさることもあった。従軍慰安婦の問題は重い。

当初、陸軍志願兵制度(1938年)、海軍志願兵制度(1943年)の形をとって、朝鮮人を皇軍に加えていたが、1943年からは学徒兵動員、1944年からは遂に一律的な徴兵制が実施されるに至った。

1936年のベルリン・オリンピックで、マラソンの孫基禎選手が優勝した。朝鮮民衆の誰もが心の中で快哉を叫んだ。「東亜日報」は彼の胸の日の丸を、黒々と塗りつぶした写真を紙面にのせた。総督府は「東亜日報」を停刊処分にし、その後、他の民族紙とともに、別の口実で永久廃刊においこんでいった。

総督府は、民族文化の保持のための活動にまで、弾圧の対象を広げた。1942年10月、朝鮮語学会事件によって、主要な朝鮮語学者のほとんどすべてを投獄した。朝鮮語学会は、美しい朝鮮語を保存することだけを目的に、地道な活動を続け、1933年には、合理的な朝鮮語の統一綴字法案を作成していた。そして、朝鮮語辞典の編纂などに努力していたが、1942年の弾圧では、辞典の原稿まで押収の対象とされ、結局失われてしまった。

- ② 1945年8月15日、日本は植民地の放棄を規定したポツダム宣言を受諾して、連合国に無条件降服した。この日本からの朝鮮民族の「解放」が、朝鮮民衆の自主的発展の軌道の完全な回復、苦難の終わりではなかった。

外力が朝鮮現代史の発展をゆがめてきた最大のあらわれは、南北の分断である。従来、ヤルタにおけるルーズベルトとスターリンの間の密約によるとする説が有力であったが、具体的な線引きが行なわれたのは、1945年8月9日のソ連参戦後、8月15日までの短い期間のことである。当時、米軍の前線はまだ沖縄に膠着していたのに対し、ソ連軍は早くも朝鮮北部に進駐しており、軍事情勢の自然の推移にまかせれば、全朝鮮がソ連軍の占領下に入るところだった。アメリカ側はそれを阻止すべく急遽協議を提案した。ソ連側は合意した。

しかし、分割占領自体は、日本軍の武装解除のための便宜的分担にすぎず、まだ一時的なものにすぎないと思われていた。それを分断国家体制にまでもっていった根本的な原因は、冷戦体制下の外力であった。

なお、38度線が境界とされた形式的根拠が、もともと日本軍の師団間の分担境界であったことは、よく知られている。

- ④ 1945年8月15日直後の時点で、独立国家の主権をどのような人々に委ねるべきかについて

の、民衆の判断の基準は、南北を通じて一様に、きわめてはっきりしていた。それは、決して単純なイデオロギー的基準でなく、日本による植民地時代をいかに志操を貫いて生きたか、民衆の先頭に立って民族解放のために闘ってきたかという基準であった。

解放直後の政治状況をリードしたのは、呂 運亨らの建国準備委員会（建準）であった。また朴 憲永らの朝鮮共産党は、動員力をほこり、「建準」の手足となって動いた。建準は、米軍進駐直前の 1945 年 9 月 6 日、ソウルに全国の人民委員会の代表を招集して会議を開き、そこで「朝鮮人民共和国」の成立を宣言し、その人事を決定した。その人事は、李 承晩から金 日成まで、過去の主要な解放闘争の指導者をすべて網羅しつつ、左派が主導権をとっていく形になっていた。しかし、これは米軍進駐前に建国の方向性を固めるために、急いで作られたものであり、国外にいた人々の了承を得たものではなかった。

以上の動きはすべて南北同様に進行していたものだが、これは 38 度線以北に進駐したソ連にとっては、比較的好ましい状況であった。ソ連軍は地方人民委員会を公認し、北朝鮮の自主的な過渡的行政機構を作らせていった。当初、新幹会以来民衆の信望を得ていた、民族主義者の曹 晩植が中心であったが、1946 年 2 月には金 日成が中心となった。

一方、南朝鮮に進駐した米軍にとっては、状況は好ましいものではなかった。アメリカは、民衆の意志と「建準」や人民委員会の実績を頭から否定して、強力な軍政をしいた。そして、政権構成の具体的過程を「米ソ合同委員会」の討議にゆだねること、そして成立した政権を、5 ヶ年間連合国の信託統治下におくことを決定した。1947 年にアメリカは「米ソ合同委員会」を完全に決裂させた。そして国連の権威によって、南朝鮮単独選挙を強行し、1948 年 8 月、親米派の李 承晩を大統領とする大韓民国を発足させてしまった。

一方、北朝鮮では、大韓民国成立直後の 1948 年 9 月、平壤で金 日成を首相とする朝鮮民主主義人民共和国の創建が宣託された。

- (25) 1948 年 4 月 3 日に済州島で人民蜂起がおこった。これを契機として、南朝鮮の各地で自然発生的な反乱が続発した。1950 年 5 月の第 2 回総選挙では、反李 承晩派が多数を占めた。

アメリカ側がことを起こすために、わざとさそいのすきをつくり、朝鮮人民軍がそれに乗って「祖国解放戦争」を決意し、1950 年 6 月 25 日、38 度線を越えたのであった。韓国軍は、戦闘らしい戦闘もなしに、逃げまどう市民を残して南への敗走を続けた。日本を基地として出動した米軍は、国連軍という錦の御旗を得た。洛東江左岸の三角地帯で、朝鮮人民軍をくいとめたすえ、50 年 9 月には仁川に逆上陸して、今度は 38 度線を北に越え、急速に北上した。米軍が朝中国境線にせまり、マッカーサーが原爆使用の威嚇を加えるにおよんで、50 年 10 月に中国人民志願軍が参戦した。朝鮮人民軍と共同して、ほどなく戦線を 38 度線付近まで押し返した。以後一進一退の膠着戦が続いたすえ、1953 年 7 月 27 日、ようやく停戦協定が成立した。

ローラーのように朝鮮全土を戦線が往復したことは、南北の民衆にはかりしれない傷痕を残した。太平洋戦争中の使用量を上回る弾薬を、米軍が集中投下したので、北朝鮮の都市と工場

は、ほとんど廃墟と化した。南朝鮮でも、ソウルなどの一般市民の犠牲者が、直接戦闘員のそれよりはるかに多かった。朝鮮人の犠牲者だけで南北合せて 126 万人、負傷者や離散家族はその何倍にも達する。朝鮮戦争の終結は、南北の分断を固定化すると同時に、在日朝鮮人の故国との自然な精神的つながりを、断ち切る結果ともなってしまった。

(26) なお、1954 年から 1972 年の諸事件については、梶村氏の著書 (1977) を参照されたい。また、1965 年から 1992 年の諸事件については、高崎氏の著書 (1993) を参照されたい。

(27) 冷戦後の日本外交の中で、最大の成果は韓国との関係の大幅改善であった (国分, 2001)。すなわち、1998 年 10 月の金 大中大統領の訪日と、当時の小淵恵三首相との日韓共同宣言だった。小淵首相は日本による植民地支配の歴史的事実を謙虚に受けとめて痛切な反省を述べ、金大統領は、そのような歴史認識の表明を真摯に受けとめて評価した。日韓両国の特に若い世代が歴史認識を深める重要性を確認し、未来志向的な関係発展への努力をうたったのであった。この時の金大統領の英断と、戦後日本の平和と発展に全面的な賛辞を贈る国会演説は、われわれに大きな感動を与えた。故小淵首相の功績も大きい。この宣言以降、両国関係は本当に「近くて近い国」になったなと嬉しく思う人々は多かった (国分, 2001 ; 小菅, 2001 ; 松永, 2001)。

ところが今年 (2001 年) にはいってから、歴史教科書問題と小泉首相の靖国神社参拝問題によって、特に韓国との関係が崩れている。韓国との歴史的和解がようやく実現した時に、どうして日本政府は歴史教科書問題で無味乾燥な対応に終始し、そのうえ首相自らが靖国神社参拝で歴史問題を荒立てたのだろうか。

靖国神社参拝を断念すれば、韓国では一挙に関係が好転する可能性があった。問題の歴史教科書の採択率が極めて低いことがわかり、政府が無策でも社会の側にバランス感覚があると、韓国の各界が感じていたからである。短期的な国内政治しか視野にない日本政府の行動は、政治的に苦しい金 大中大統領をさらに窮地に追いやった。まさに日本は、恩を仇で返しているといっても過言ではない (国分, 2001 ; 小菅, 2001)。

### 3. 満州 (中国東北地方)

満州については主に、坂本龍彦氏の著書 (1998) を参照した。

(1) 満州族の先祖は、現在のロシア沿海州地方に住んでいた狩猟・漁業の民、ツングース族である。8 世紀に、満州東部から沿海州におよぶ渤海国が建国された。この頃から女真族 (ツングース族) と名乗るようになった。明代の女真族は、建州女真 (南満州)、海西女真 (北満州)、野人女真 (黒竜江流域) の三部族に分かれていた。1616 年、建州の首長・愛新覚羅家のヌルハチは女真族を統合して後金を建国した。ヌルハチの子ホンタイジ (太宗) は 1636 年、国名を

清に改めた。1644 年、清は明を抑えて、中国全土の支配を開始した。その頃、女真という民族名は満州族に変わっており、これが居住地域名にもなった。女真歴代の首長は、釈迦の弟子で智慧の仏・文殊菩薩への信仰から、自分の名前を「文殊」とつけた者が多く、その音が転化して「満州」になった、と伝えられている。

- (2) 清国の軍事制度の根幹は八旗制度であった。これは、満州族をすべて軍人とし、旗の色によって軍団に分けた世襲兵制である。清朝政府は 18 世紀に満州の松花江沿いの肥えた大地の開拓民として、北京から満州旗人 3,000 人を送るものの、彼らは生活資金を使い果たすと、寒さや開拓生活に耐えられず、北京へ逃げ帰った。1823 年には双城子へ、1,000 人の開拓民を送るが、この試みも失敗する。
- (3) 清国の武威が盛んだった康熙帝の 1689 年に、ネルチンスク講和会議で決められた、満州とロシアとの国境線は、現在の国境線よりも大幅にロシア側に食いこんでいた。しかし、その後約 170 年を経た清国は、太平天国の乱で苦しんでいた。当時、ロシアは南下策をつづけていた。1858 年 5 月に、国境の黒竜江河畔の街瑗瑗<sup>アイグン</sup>で開かれた国境確定会議で、ロシア側は清国から大きな譲歩を勝ち取った。
- (4) 1858 年の瑗瑗<sup>アイグン</sup>での条約で、沿海州（ウスリー江から日本海に至る細長い土地）は、清国とロシア両国の共有地になった。その 2 年後の 1860 年、ロシアは第 2 次阿片戦争（アロー戦争）を調停した報酬として、現在のロシア領沿海州を獲得した。清国がロシアに手放した領土の延長線は、アジア大陸の奥地からオホーツク海、日本海沿岸にかけて、8,000km におよんだ。
- (5) 清国は阿片戦争と第 2 次阿片戦争で、香港・九龍などの領土を割譲、英艦の自由入港、外国人による関税行政、外国居留民による居留地建設など、さまざまな主権を失い、賠償金の利子つき支払いも重くのしかかっていた。1864 年まで 15 年間つづいた太平天国の乱と重なり、清国には経済危機が訪れた。
- (6) 清国は、日清戦争（1894 - 95）で敗れた。日本は、(a) 政府の財政の 4 年分にあたる賠償金の獲得、(b) 台湾の割譲、(c) 中国へ資本輸出する権利、などを得た。この賠償金などが日本の金本位制の基盤をつくり、産業革命を促進し、綿工業などの製造業が中国に進出し、工場群をつくっていった。

陸奥宗光に『蹇蹇録』という著作がある。これは、三国干渉への対処をも含めた、日清戦争の全過程について、その外交指導の概要を述べた書物である。日本の外務大臣が、自分の直接かかわった外交問題について、その事件が一段落した直後に、事の顛末を詳述して出版したというのは、他に例を見ない（中塚、1992）。その意味で『蹇蹇録』は、日本近代史上、異例の

著作である。『蹇蹇録』は1896（明治29）年、外務省で印刷されたが、1929（昭和4）年に公刊されるまで、外交上の機密にかかわる記述があると考えられ、長く「部外秘」とされた。それだけに、いわゆる「陸奥外交」の精髓が凝縮された、稀に見る名著との評判の高いものである。中塚 明の著書（1992）では、陸奥宗光がなぜ『蹇蹇録』を書いたのかを、陸奥が推敲に推敲を重ねたことを含めて考察し、さらに「陸奥外交」の実態を明らかにし、それが近代日本において持つ歴史的な意味を論じている。さらに中塚（1993）は、近代日本の朝鮮認識について論述している。

(7) 「扶清滅洋」の旗を掲げた、反キリスト教民衆運動の義和団は、清朝の支援を得て盛んとなり、1900年北京でドイツ公使を殺害し、同年6月、清は列強各国に宣戦を布告した。日本、ドイツ、イタリア、米国、英国、フランス、ロシア、オーストリアの8カ国が、連合軍を出して北京を占領した。清は議定書で列強の華北駐屯を承認し、賠償金として戦費の4億5000万両を列強に支払う協定も結ばされ、経済危機がいっそう深まった。

(8) 清国のこうした状況につけ込んで、ロシアは満州をねらった。1900年7月、黒竜江をはさんで、ロシア側のブラゴベシチェンスクのロシア軍と、対岸の中国側の清軍との間で砲撃戦がくりひろげられた。7月16日、ブラゴベ市の中国人街に監禁していた中国人の大群を、ロシア軍が黒竜江河畔で虐殺して大河を血に染めた。7月17日にはロシア軍は、黒竜江左岸（ロシア領）の中国人集落を襲い、農民と家族7,000余人を殺して全滅させた。これが衆知の「ブラゴベの大虐殺」である。

8月3日に、2,000人のロシア軍は、ブラゴベ市の対岸黒河に上陸してこれを占領し、ひきつづいて瑗瑋城を占領し、城内を屍で埋めた。瑗瑋を脱出した中国市民約2万人は南のチチハルに向かう街道にひしめいた。ロシア軍は市民に対して一斉射撃を行ない虐殺を重ねた。詩人土井晩翠は、

「記せよ 西紀 千九百年 なんじの水は墓なりき  
 五千の生命罪なくて ここに幽冥の鬼となりぬ  
 その悽惨の恨みより この岸永く花なけん」と詠った。

(9) この大虐殺をきっかけに、20万のロシア軍は満州に侵入し、チチハル・ハルビン・綏芬河・寧古塔・奉天を占拠した。ロシアが建設を進めていた東支鉄道は、満州領内の満州里・チチハル・ハルビンを経て、ロシアのチタとウラジオストックを結ぶものであった。この東支鉄道の建設に対して、義和団、中国馬賊や中国農民の反対暴動がおこった。これがロシアと清国の紛争の発端であった。1900年末に満州の拠点軍事占領したロシアは、満州と朝鮮国境の鴨緑江沿岸に兵力を集中し、河口の韓国側にも軍事施設を構築した。

満州に居すわったロシアは、日清戦争の講和条約で日本への割譲が決まっていた遼東半島を





中国に還付させた。そしてロシアは、遼東半島の旅順・大連の租借権を清国から獲得した。

- (10) 日本は1902年1月、日英同盟を締結し、ロシアに対し、大英帝国という後ろ盾を得た。1904年2月9日、日本連合艦隊は旅順港外でロシア艦隊を水雷攻撃して、日露戦争の火ぶたが切られた。

日露戦争で日本は109万人の将兵を動かし、戦死者は43,000人、戦病死者は63,000人に達した。あいつぐ増税と国債の発行でまかなくなった戦争経費は20億円に達した。これは国力の限界であった。1905年3月の奉天大会戦と、同年5月の日本海海戦の勝利で、ようやく日本は胸をなでおろした。

日本は米国ポーツマスでの講和会議で、朝鮮に対する保護権を確保し、遼東半島の租借権を獲得、長春 - 旅順間の東清鉄道もロシアから譲渡された。清国政府の承認も得た日本の満州経営は、関東州と呼んだ遼東半島の軍事支配と、大輸送網計画を実現する国策会社・南満州鉄道株式会社（満鉄）の設立だった。満鉄は日本の先兵として炭坑を管理し、ホテル、病院、学校の経営にも当たるようになった。

日露戦争後、日本とロシアは日露秘密協定を結んで、北満州と南満州の分界線を定めていた。中国を抜きにして、北満州はロシア、南満州は日本の勢力範囲というわけであった。

- (11) 第1次世界大戦（1914 - 18）で日本は、同盟国の英国から参戦を求められ、膠州湾の青島を攻撃して、ドイツ軍守備隊を降伏させた。直後の1915年1月、対中国21カ条要求を、日置益駐華大使は袁世凱大總統に手渡した。

日本は武力行使をほのめかしたので、中国は1915年5月9日、遂に21カ条要求を受け入れた。そしてこの5月9日は、中国の国恥記念日として長く記憶されることになった。この結果、(a) 日本による関東州の租借権と満鉄の経営権を99年間に延長、(b) 南満州の鉄道施設権と諸鉱山の採掘権を日本が獲得、(c) 南満州での農業経営や商工業施設のために、日本は土地の賃借権を確保、など日本は権益を広げた。さらに1916年に日露協約を結び、ロシアが満州に対する日本の権益を認め、日本が外蒙古に対するロシアの特殊権益を認めていた。

- (12) 1917年3月、労働者と兵士の結合組織ソビエトによって、ロシアのロマノフ王朝は倒され、同年11月にはレーニンらによって社会主義政権が樹立された。1918年3月、ソビエト政権はドイツと単独講和を結んで、第1次大戦の戦線を離脱し、秘密の日露協約も公表されて無効となった。

日本は、ロシアが実権をもっていた北満州を、この機会に勢力圏に入れようと考えた。英・仏・米などが対ソ革命干渉戦争に動き出し、日本にも参加を求めてきた。日本はシベリアに軍隊を送り、1918年8月から1922年6月のシベリア撤兵宣言までの4年間弱出兵をつづけた。英・仏・米の軍隊が1920年4月までに撤兵を終えたのに、日本は反ソビエト国家をシベリア

につくことに執着した。しかし、日本のシベリア出兵はみじめな失敗に終わった。

- (13) 昭和にはいって、満州を日本の支配下に置き、シベリアをもうかがう日本軍部の動きはますます活発になり、1928年6月4日、関東軍高級参謀らの陰謀で、満州の支配者 張 作霖大元帥は奉天郊外で爆殺された。

奉天軍閥首領の張 作霖は匪賊の出身だった。中国の近現代史の中で匪賊、馬賊の果たした役割は少なくない。

東北三省（遼寧・吉林・黒竜江省）から熱河省（現 内モンゴ）にわたる地域を武力で制圧した奉天軍閥は、満州事変の起こるまでの15年間、張 作霖を統領として、旧満州地域を統治していた。

とくに1920年以後、他の軍閥と覇権を争って出兵を繰返していた奉天軍閥の拠点・奉天省（現 遼寧省）では、1922年の軍事費が歳出総額の81%、1929年には95%を占めていた。軍事費をまかなうために、たえず課税を強化した張 作霖の政府は、阿片の栽培・販売でも利益を上げていた。また、張 作霖政権は、1926年の1年間に、日本銀行から1,400万円を借款したり、奉天票（張 作霖政権下で通用した軍票）を増刷して軍事費をまかない、インフレは亢進した。

もともと日本軍の支援で勢力を伸ばした張 作霖は、北京政府の大元帥の地位に就いてから、対日依存から自立路線への転換をはかっていた。日本人の土地所有を認めず、満鉄と競合する鉄路をもつかった。

こうした張 作霖の態度を不満として、中国革命派の犯行に見せかけて謀殺したのが、関東軍高級参謀 河本大作大佐の命を受けた奉天独立守備隊であった。守備隊長 東宮鉄男<sup>カネ</sup>はその後、満州開拓の父と呼ばれた。張 作霖が中国革命派に爆殺されたとデマ宣伝することで内乱が起これば、関東軍を出動させ、一挙に満州を軍事占領しようと計画したのである。

- (14) しかし、中国側は日本の陰謀を見抜いていて動かず、国民政府の蔣 介石総統によって東北边防総司令長官に任命された張 学良（張 作霖の長男）は、排日の旗色を明らかにした。日本人工場の閉鎖や破壊、鉱山での採掘禁止、さらに満鉄を包囲する形の新幹線計画を進め、日本人農場内への鉄道建設を進めた。

在満日本人の間では「中国本土からの満蒙独立」の声が高まり、関東軍は全満州の軍事制圧の準備を進めた。1931年9月18日、関東軍の奉天独立守備歩兵第2大隊第3中隊長以下数人が、奉天駅北方8kmの柳条湖で満鉄線を爆破した。これが満州事変の発端である。「支那軍隊は満鉄を破壊、守備隊を襲ひ」と陸軍大臣に打電した関東軍は、張 学良軍司令部のある奉天を制圧、營口・安東・吉林・長春などの主要都市を軍事占領した。当時軍事力をつけてきた中国共産党と国民党の対立が深刻化し、抗日戦に踏み切れなかった蔣 介石の方針に従い、張 学良は東北地方の軍隊に無抵抗を指示した。

関東軍は1932年2月までに北のチチハル、ハルビン、西南の錦州を占領した。こうした日本による全満州の軍事制圧を、中国は侵略行為として国際連盟に提訴した。リットン卿調査団の報告をもとに、国際連盟は、総会の決議で、占領地からの日本軍隊の引きあげを勧告した。総会で孤立した日本は、1933年に国際連盟を脱退した。決然と退場する日本全権 松岡洋右の姿を、私は少年時代に、ニュース映画で何回となく見た。

1936年12月12日に張 学良は、抗日戦に消極的だった蔣 介石を、陝西省の西安で監禁し、共産党軍との内戦の停止を迫り、一致しての抗日を迫った。いわゆる西安事件である。この時張 学良は、共産党代表として延安から来た周恩来を蔣 介石に引き合わせた。そして、日本の侵略に対する「全民族的な抵抗の必要性」を蔣 介石に訴えさせた。これが1937年の第2次国共合作につながった。なお、張 学良が起こした西安事件を、上海の通信社にいてスクープしたのは、若き日の松本重治であった。

西安事件後に、南京で軍事裁判にかけられた張 学良は、監視生活で中国各地を転々とした後、台湾に移り、1986年まで50年近い軟禁状態が続いた。1994年に米国ハワイ州に移住したが、2000年に長年連れ添った趙 一荻夫人(87歳)を亡くし、衰えが目立ち、2001年10月14日、肺炎のため、ハワイ州ホノルルで逝去した。享年100歳であった。

- (15) 1932年3月1日、東北行政委員会の名で満州国建国宣言が行われた。同委員会は、のちの首相の張 景恵、チチハルの攻防戦で激しく関東軍に抵抗した馬 占山など、東北地方の四首領を中心に組織され、中国人の発意による建国という体裁をとった。

この満州国の国首である執政となったのが、1908年満3歳に満たずに、清国最後の皇帝である宣統帝を名乗った、愛新覚羅溥儀であった。満州族として、溥儀は清朝の復活を願っていた。建国2年後の1934年3月1日、溥儀は念願の皇帝に就任し、王道楽土と五族協和を目的とする、満州国の帝政がスタートした。五族とは、漢民族・満州民族・朝鮮民族・蒙古民族・日本民族の五族である。

しかし、満州国の実態は、軍事権から人事権まで日本に奪われた傀儡国家であった。1932年9月15日に日満議定書が調印された。(a)国防と治安は日本に委託し、経費は満州国が支払う。(b)鉄道・港湾・水路・航空路などの管理や敷設をすべて日本に委託する。(c)満州国は日本軍が必要とする施設を極力援助する。(d)日本軍司令官の推薦で日本人を参議(執政の諮問機関)に任命し、解職には司令官の同意が必要である。(e)日本軍司令官の推薦で日本人を中央官庁や地方官庁の職に任命し、解職には司令官の同意が必要である。といった内容である。調印式に臨んだ鄭 孝胥 満州国國務総理は、満州国を清朝の復活だと期待していたが、まったく裏切られ、やがて罷免された。

満州事変を仕組んだ当時の関東軍作戦参謀・石原莞爾 陸軍中佐は、世界最終戦として日米決戦を予測し、その戦いに備える資源基地として満蒙に注目していた。石原が関東軍高級参謀・板垣征四郎 陸軍大佐と計画を練った満州事変は、満州を日本の領土とし、兵站基地として対

ソ連作戦をも担わせる画策の具体化であった。

- (16) 満州国建国直前の 1932 年 2 月、関東軍は 15 年間に 10 万戸の移民を目標とした「日本人移民案要綱」をつくり、これが政府案の骨子となった。1932 年 8 月 30 日、第 1 回満州試験移民の予算案が衆議院の臨時議会を通過し、在郷軍人会のメンバーから移民団を選んだ。

移民活動を推進した、石黒忠篤（農林次官）や加藤完治（日本国民高校校長）や宗 光彦（初代千振郷開拓団長）らが中心になって作成した「満蒙植民事業計画書」には、「先ず軍憲（軍隊と憲兵隊）に於て匪賊の絶滅を期し、更に地方の治安維持を厳行すべきものなれども、尚其の絶滅は困難なるをもって、農村には屯田兵を組織し警備の要あり」と述べられている。これが弥栄村開拓団（第 1 次武装移民団）と千振郷開拓団（第 2 次武装移民団）の任務であった。

第 1 次の 493 人が、ハルピンから松花江の航路で、佳木斯の埠頭に着いた 1932 年 10 月 14 日夜、移民団は日本軍守備隊を襲う匪賊の銃声とトキの声で、なかなか寝つかれなかった。佳木斯から南へ 50 数 km 離れた、入植予定地の永豊鎮に向って出発できたのは、1933 年 2 月 11 日だった。先遣隊 150 人は、日本軍と協力して、2 月 14 日からは近くの匪賊根拠地を襲撃した。2 月 15 日の戦闘では 1 人の戦死者が出、以後戦死者が続出した。

1933 年 6 月 20 日には、さらに戦死者 3 人を出し、風土病のアミーバ赤痢にかかる団員たちも 400 人に達した。粟飯を食べ、タバコ銭にもコト欠きながら、連日土を耕す生活、時々匪襲。防寒設備は不十分で、病人が続出した。内地送還者が次々と出て、家屋の建築もはかどらない。匪賊に安全を脅かされる中で、妻子を呼び寄せられないいらだちもついていた。団員たちの脱落はあいつぎ、1933 年末には 300 余名の団員になってしまった。

- (17) 第 2 次武装移民団 455 人は、1933 年 7 月に、第 1 次武装移民団の隣接地湖南営に入植した。そして間もなく、満州国の基盤をゆさぶった、「土竜山事件」に巻きこまれた。

1934 年 3 月 4、5 日ごろ、移民反対運動の総司令となった謝 文東の本拠・土竜山には、銃器を持った匪賊などの抗日勢力 700 人が集まり、武装した農民を合せると 7,000 人もの大勢力になっていた。土竜山は松花江河畔の依蘭から東方 40km にあり、謝 文東は周辺の村長と自衛団長をしていた信望の厚い男だった。

抗日・反満州国運動のきっかけは、農業移民のために関東軍が、周辺の土地接収や武器回収に乗り出したことである。

謝 文東の軍は、まず土竜山警察署を襲い、関東軍の連隊長などを倒し、第 1 次および第 2 次移民部隊を包囲して、襲撃をくり返した。日本人入植者は、謝 文東の乱に大きな衝撃を受けた。

- (18) 土竜山事件の背景となったのは、次の3つである。(a) 日本が満州国を独立国として承認しながら、満州国の承諾なしに広大な土地を買収し、日本人を計画的に移住させた。(b) 土地買収は関東軍の機密として企てられ、満鉄の子会社の東亜勸業会社が買収の実務に当たった。未墾地とともに熟地（既墾地）をも買収計画に組み入れた。当時、北満州の土地相場は、7反5畝（約75アール）で熟地が10円から17.8円、未墾地が1円以下だった。軍は熟地・未墾地を、平均して7反5畝あたり1円の安値で買うよう指導した。(c) 土竜山ではこうした超安値での買収を拒み、土地を守るための相談会が現地農民の間で重ねられ、東北民族自衛のための決起が決定された。

関東軍は1934年1月から、数百万町歩に及ぶ土地買収工作を始めた。おどかして中国人農民の印鑑を集め、関東軍の工作班が勝手に委任状を作って土地譲渡の手続きをしたり、民家の壁を兵隊が銃床で破って、隠しておいた地券（土地権利証）を取り上げたりした。

入植地の土地決定も、関東軍の対ソ作戦と治安対策の必要によってなされ、入植者の希望によるものではなかった。現地民と入植者は話し合うこともなく、買収工作が先行した。入植者や現地住民の生活をどう安定させていくか、という配慮もないまま、農業移民実現の功を焦って、急ぎ過ぎた関東軍のやり方であった。このことが、敗戦後の開拓団の悲惨な結末につながったと考えられる。

- (19) 満州事変によって関東軍が満州を軍事占拠する前、日本の農業移民は満鉄付属地の740戸だけだった。

満州国創設（1932年3月）で大量移民が可能となり、弥栄、千振から始まった試験移民期間は、1936年の第5次までつづき、樺川・依蘭・綏稜・密山県に2,785戸が入植した。日本政府は1936年7月、以後20年間に100万戸を送り出す「満州農業移民計画」を作り、当時の広田弘毅内閣はこの計画を、七大政策の一つにした。

土竜山事件以降、軍でなく満州国の責任で移民の土地を提供することになり、1936年1月、満州国は半官半民の満州拓殖株式会社（満拓）を設立、移民事業の買収・経営に当たることになった。省、県、旗（行政単位）は開墾地整備委員会を作って中国農民に働きかけ、満拓に買収を斡旋した。

没収した国有地・官有地や逆産地（不毛地）、地主のいない土地は、日本移民計画用地として、満州国から割譲され、こうした無償土地も103万500町歩に達した。しかし、国有地や官有地には限りがあり、中国の農民が所有する既耕地を入手する必要に迫られた。満拓社は1936年以後、地図上で買収地を設定し、価格も決定して、土地の主人に一方的に通知した。農民が土地権利証を渡すことをためらっていると、警察が来て脅し、買収した。

たとえば、依蘭南方の紅星郷では、1939年に第8次日本人集団移民が入植するが、その前年（1938年）、依蘭の役場は、紅星郷一帯の土地は、満州国がすべて買収を完了したと言って、強制的に土地権利証を集めた。売買の単位面積当り市価は最低30元だったのに、日本と満州

国当局は、土地の質に関係なく、一律 2 元にし、しかも現金を全部渡さなかった。1938 年秋、日本軍隊は「一帯は匪賊の拠点地区」だと言い、周辺 45km を焼き払い、人家がなくなった。中国の農民にはそこを立ち去ることを迫り、拒絶した農民を殺した。武装抗日勢力を消し、日本人開拓団への土地分配のため、法律上は所有者でなくなっている中国農民を追い払った。

1941 年までに日本と満州国が獲得した土地は 2,000 万公頃（一公頃は 1 ヘクタール = 約 1 町）に達し、移民 100 万戸受け入れのために、1,000 万町歩必要という目標の 2 倍になった。

日本と満州国政府はさらに、1942 年 1 月「満州開拓第 2 期 5 ヶ年計画」を発表し、東北地方農民の利用地（既墾地）を強制買収し、土地収奪はさらに本格化した。

農業移民する日本人の開拓農家に分けられる土地は、耕作地 10 町歩（約 10 ヘクタール）、放牧草地 10 町歩の、計 20 町歩が基準だった。

しかし、その土地を全部は耕し切れず、現地農民に貸し出し、地代（小作料）を取って、労働をしない開拓民も出てきた。1942 年当時、弥栄村の日本開拓農民の耕作総面積の 26.5% だけが、開拓民が自分で耕す土地で、73.5% は現地住民が耕す小作地だった。

日本側が“抗日共産匪”と名づけたゲリラと中国民衆を切り離すために、日満合同の大衆組織である治安維持会や協和会が運動を繰り広げた。その一方で、関東軍は、「匪賊」討伐を徹底して行った。1937 年の「匪賊」出現回数は約 26,000 回だったが、1940 年には 3,700 回に減った。

- (20) 1944 年初めから、南方戦線で敗退消耗した兵力補充のため、何十万という精鋭部隊が関東軍から引き抜かれ、フィリピンなどの南方戦線に転進していった。

1944 年 11 月にソ連のスターリン首相は「日本を侵略国とみなす」と演説し、1945 年 2 月の米英ソ巨頭会談（ヤルタ会談）では、対日参戦との引換えに、樺太（サハリン）、千島などのソ連への領土割譲が決められていた。1945 年 4 月 5 日、ソ連は日ソ中立条約を将来に向けて廃棄することを日本政府に通告し、対独戦で勝利した兵力をソ満国境に集結させていた。ソ連の侵入が時間の問題になっている時、関東軍では、国境の開拓農民を後方に避難させるか否かが議論された。関東軍は作戦上の見地から現状維持と決した。日本人の後方避難はソ連の警戒心を引き起こし、軍の作戦意図を察知させるという理由からであった。

ソ連軍侵攻 1 週間前の 1945 年 8 月 2 日、関東軍報道部長・長谷川守一大佐は新京（現 長春）放送局から「関東軍八盤石ノ安キニアル。邦人、トクニ国境開拓団ノ諸君ハ安ンジテ、生業ニ励ムガヨロシイ」とウソの放送を行った。その頃軍の撤退はほぼ完了し、軍人家族を満載した列車が新京駅から南下して行った。

1945 年 8 月 9 日にソ連が満州に侵攻してきた当時の在満日本人は、20 万人前後の関東州在住者を含めて 154 万 9700 人と推定され、1946 年 3 月には 145 万人と推定されている。これは、大部分がシベリアに抑留された軍人・軍属ははっていない数字である。一方、敗戦後の在満日本人死亡者は、1945 年から 1946 年を中心に約 19 万人に達し、その後の死者と行方不明者

は3万人と推定されている。

- (2) 敗戦直前の1945年8月10日と直後の同年8月19日に、大本営参謀5課（ソ連担当）の作戦班長だった朝枝繁春大佐が、梅津美治郎大本営参謀総長の直接の訓令を受けた大本営軍使として、関東軍司令部に飛来してきた。朝枝参謀は、満州、朝鮮所在の軍や在留邦人の復員、引揚げなどについて、現地で善処する役割を担っていた。

朝枝参謀は、1945年8月26日に「関東軍方面停戦状況ニ関スル実施報告」を書いた。この報告書は、ソ連の元保安機関に資料として保管されていた。「在留邦人八（日ソ）開戦ト同時ニ無準備ニ移動セシ為、携帯糧食等欠乏シツツアリ、加フルニ留守家屋八満人ノ盗難ニ遭ヒ産ヲ無クシ、明日ヨリノ生活ニ窮乏スルモノ頻発シツツアリ」と、窮状を察知しながら、「但シ是等モ治安ノ恢復・経済ノ安定等ニ伴ヒ、逐次良好ナル状態ニ還ルモノト考フ」と楽観的な見通しを述べている。事實は、難民の状態は寒さに向かう中でますます悪化し、各地の収容所は死体収容所になっていった。

朝枝参謀の報告書で最も注目すべきは「第四、今後ノ処置」の項目である。「内地ニ於ケル食糧事情及ビ思想経済事情ヨリ考フルニ、既定方針通り大陸方面ニ於テハ在留邦人及武装解除後ノ軍人ハソ聯ノ庇護下ニ満鮮ニ土着セシメテ生活ヲ営ム如クソ聯側ニ依頼スルヲ可トス」ソ連当局に頼んで、在留日本人や武装を解除された軍人は、満州や朝鮮に土着定住して生活できるようにしたい、というのである。

「土着セシムル方法」も書いている。

「1. 患者及ビ内地帰還希望ヲ除ク外ハ速カニソ聯ノ指令ニヨリ各々各自技能ニ応ジル定職に就カシム

2. 満鮮ニ土着スル者ハ日本国籍ヲ離ルルモ支障ナキモノトス」

そして「3」として、今冬期前にまず軍隊40万、傷病兵3万、在留邦人30万人を内地に向け輸送しなければならないとし、「而シテ之ガ輸送ハ船舶、鉄道ノ運用、輸送間ノ休養等龐大ナル仕事ニシテ、一ツニ、ソ連ヲ通シテ聯合側ニ依頼セザレバ不可能ナル問題ナリ」と記している。在留邦人30万人というのは、日本人満州居住者の1/5にも満たない。極限状況にある開拓関係者などの一般邦人を、祖国と切り離して「棄民」とすることにほかならなかった。

秦彦三郎関東軍総参謀長は、この「朝枝報告」を「全般的ニ同意ナリ」とし「武装解除後ノ軍隊並ニ居留民ノ実情ハ衣食住共極メテ深刻ニシテ殊ニ冬季ヲ控ヘ真ニ樂觀ヲ許サズ。従テ之ガ処理ニ就テハ大本営トシテハ至急聯合國最高司令部トモ話合ヒノ上措置スベキモノト思考ス」と要望した。

関東軍も大本営も、敗戦前の日本人の生業を、満州で継続できるかのような見通しの下に方針を立てたが、これは現実から完全に遊離していた。このため、旧満州で地獄の苦しみをなめた老若男女の祖国への引揚げは、中国本土の日本軍隊よりはるかに遅れざるを得ず、第1陣の難民の引揚げ部隊が、錦州湾に面した葫蘆島を日本へ向け出港したのは、ようやく1946年5

月 14 日のことだった。1945 年の秋口には、中国本土、台湾、南方などからの引揚げ者が、博多港や佐世保港などに殺到していたというのに。

坂本氏 (1998) は、この「朝枝報告」が、軍人・軍属たちのソ連抑留への道を開いたのではないかと、「朝枝報告」が発見された近年、問題になったと述べている。

- ② 731 部隊は 1936 年天皇の秘密軍令 (勅令) で編成され、陸軍大臣の命令で石井四郎が部隊長に任命された、参謀本部直属の国家機関であった。所在地には最初ハルビン市が選ばれた。1940 年、部隊の主力は十分な敷地のあるハルビン郊外の平房駅近くへ移った。1940 年当時の 731 部隊の維持費は 1,000 万円であり、そのうち 500 万円は生体実験を含めた実験業務費であった。731 部隊の正式部隊名は「関東防疫給水本部」であり、死に至る生体実験や細菌戦の実施部隊であった。

731 部隊が平房駅近くに在った 5 年間 (1940 年 - 1945 年) に、この殺人工場内で殺人細菌に感染させられて殺害された者の数は、少くとも 3,000 名に達した。1945 年 8 月 9 日のソ連軍侵攻直後、関東軍司令官山田乙三大将の命令によって、ハルビン駐屯の工兵隊によって、731 部隊の施設は爆破され、監獄にいたマルタ (生体実験材料にされた囚人) 数百人は虐殺された。

1945 年 8 月 12 日、ソ連軍のハルビン進攻前に、731 部隊の隊員は避難列車に乗り込んだ。途中、現地民に妨害されたこともあったが、積込んできた米俵を贈って、釜山に安着した。釜山には、731 部隊の隊員を日本本土に送る、駆逐艦「秋月」が待ち構えていた。

まことにスピーディな脱出であった。3,000 人もの隊員を早く帰国させて、人体実験の痕跡を消し去ることが、日本政府や大本營の方針であった。部隊長石井四郎陸軍軍医中将も、ソ連軍侵攻までに脱出して帰国し、生体実験記録などを米軍に渡すことで、極東軍事裁判 (東京裁判) に訴追されるのを免れた。

1939 年のノモンハン事件では、細菌戦のために石油缶に入れて密封したチフス、パラチフス、赤痢菌が、ハルハ川の上流に流され、日本軍からも多数のパラチフス患者が出た。

細菌戦部隊で最も有効な細菌兵器とされていたのが、ペストに感染したノミを詰めた「石井式陶磁器製爆弾」であった。これを投下し 1940 年には、寧波付近でペストが流行し、1941 年夏には、洞庭湖近くの常德市一帯でペストが流行した。1942 年には、玉山、金華、浦江などの都市周辺で、ペストノミ、コレラ菌、パラチフス菌を散布して、これらを流行させた。

731 部隊は戦時中、埼玉県東部 (春日部市、庄和町、杉戸町など) のネズミ飼育農家 6,000 戸から 1 ヶ月 4 万匹ないし 5 万匹のネズミを買い付けていた。ネズミの半数以上は、731 部隊の専用機で、立川飛行場から平房駅近くの 731 部隊本部に送られた。これらのネズミはペストネズミとなり、血を吸わせてペストノミが製造され、「石井式陶磁器製爆弾」につめこまれて投下された。

731 部隊の専用機は、マルタの死後体をサンプルとして積んでいた。これらのサンプルは、



東京新宿区戸山の陸軍軍医学校に空輸され、同校の八角講堂（臨床講堂）や標本室に置かれ、教材として使われていた。

日本の細菌戦計画は、単に 731 部隊や石井四郎だけの暴走ではなく、日本陸軍ぐるみであった。そして、東京の陸軍防疫給水本部が各細菌部隊の中枢であった。細菌部隊の関係者は 2 万人にも達していた。

埼玉県東部のネズミ飼育農家の中心人物は、戦後、日本軍の注文がなくなると、米軍の大量注文を獲得し、米軍の細菌戦部隊といわれる 406 部隊に納入した。とくに朝鮮戦争が勃発した 1950 年には 45 万匹のネズミを納入した。しかし、朝鮮戦争の終結（1953 年 7 月）とともに下火になっていった。また、731 部隊から 406 部隊入りした、細菌・化学戦専門家も少なくなかった。

1952 年、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と中国は、米軍が細菌戦を行っていることを抗議した。国際赤十字委員会と WHO（世界保健機関）が現地調査し、米軍の手法は旧日本軍の手法に酷似していると結論した。406 部隊は 731 部隊の細菌戦情報を引き継ぎ、実戦の場に利用したのである。

なお、731 部隊の隊員が 1945 年 8 月 12 日に、平房からスピーディに脱出したあと、それまで見たこともなかった白ネズミ（ペストネズミ）が、平房周辺の畠や穀物収納庫を荒し、運んできたペスト菌で、多数の村民が命を落した。

#### 4. 中国

私は最近、韓 瑞穂さんの著書（2000）を深い感銘をもって読んだ。素晴らしい記憶力の著者が、1922 年秋の誕生以降の足跡を、刻明に、丹念に、しかも淡々と述べているので、非常に読みやすい本であった。ことに、1944 年 4 月に夫 韓 向辰とともに、日本から中国に渡ってから、1997 年頃までの中国での約 50 年間の動静が、具体的に述べられているので、勉強になった。毛沢東は 1976 年 9 月 9 日に死去するが、その死の時まで、最高権力と神格性を堅持、自分の命令が末端まで行き渡り、全人民がそれに従うような、全体主義の政治体制を変えようとはしなかったらしい。この著書によって、彭 徳懐、劉 少奇、周 恩来、鄧 小平などの苦悩がよく理解できた。日本と中国は大変に近い隣国でありながら、知らないことの多さに驚いている。

- (1) さて、韓 瑞穂は、もともと日本人であった。1922 年 10 月 21 日東京・お茶の水に私生児として生まれた。神奈川県小田原市の平井立三の養女となり、平井瑞子の名を得た。1923 年の関東大震災で財産を失った平井夫婦は、1924 年小田原から東京・国分寺に転居し、井戸水汲み上げポンプの売上げ、土木建設請負業で成功した。1933 年に東京・中野の昭和女学校に入学した。1934 年に産みの親の原田峰子と初めて会った。1938 年に日本女子高等学院（現 昭和女子大学）の国文科に入学した。1941 年秋、法政大学留学中の中国人、韓 向辰と出会った。

1942年3月、日本女子高等学院を卒業した。しかし当日、養母の和江が病死したため、卒業式には出られなかった。1943年4月韓 向辰と結婚し、同年7月、中国人との結婚による日本国籍喪失の許可を得、中華民国在横浜総領事館で中国籍を取得、在日華僑という身分になった。

1944年4月夫、韓 向辰の帰国に同行した。夫の実家は地主出身の民族資本家であり、北京の大きな邸宅に一族が住んでいた。韓家の人々は、韓 瑞穂を温かく迎え、遇してくれた。韓家には秘密があった。義父をはじめ一族は、中国共産党の支援者であり、韓家は共産党の地下連絡所だったのだ。一族は共産党こそが中国を救えると心から信じ、あらゆる支援を惜しまなかった。韓 瑞穂も次第に同じ考えに立つようになり、1945年の春から、共産党の支援活動に参加した。

- (2) 1945年夏、日本の降伏で戦争は終わり、今度は共産党と国民党による内戦が始まった。1946年5月には、共産党の人民解放軍（八路軍）に加わり、燕山山中を転戦し、1946年12月に燕山を下り、河北省東部・楽亭の韓一族の老家へ移り、1947年11月には河北省孟家舗の解放区へ入った。1948年3月、共産党の求めに応じ、急きょ畑違いの医学を馬蘭峪の軍医大で学び、軍医になって負傷兵らの手当てに献身した。1948年8月孟家舗に戻り、戦闘に遭遇しながら燕山山中を転々とした。1948年11月、医療分隊に加わり、内蒙古東部の王爺府へ移動し、1948年12月には、遼寧省の朝陽市へ移動した。1949年1月には、同じく遼寧省の錦州市へ移動したが、途中国民党軍と遭遇して銃撃戦を交えた。

人民解放軍はこの頃（1949年1月）北京へ無血入城した。1949年2月には、南下作戦参加のため北京へ戻り、1949年3月には、解放軍第4野戦軍第48軍161師団の宣伝工作隊に加わって、南下を開始した。1949年6月には長江を渡り、江西省九江に到着し、医療活動を再開した。1949年7月には、江西省南昌へ移動し、同年8月には江西省景德鎮へ移動した。3年以上続いた内戦において、共産党の勝利が確定的になった1949年10月1日、中華人民共和国の成立が宣言された。人々は熱狂し、社会主義の理想に燃える、毛 沢東主席の指導の下で、社会主義改造と建設が始まった。1950年3月に南昌に戻り、軍区司令部診療所に勤務した。その後、華東医学院で耳鼻咽喉科学を学んだ。1953年1月には軍務を離れ、江西医学院付属病院の耳鼻咽喉科医になった。夫は江西省政府の教育庁に転勤することになった。1955年5月、天津市立第3病院耳鼻咽喉科に転勤した。夫は天津医科大学党委員会幹部になった。

韓 瑞穂は外国人では極めて稀なことに、1955年10月に共産党への入党を認められた。現在も党員である。それは、共産党に誠心誠意尽した結果だったと瑞穂は思っている。党を信じ、革命に参加することに生きがいと喜びを感じていた。何度かあった日本帰国のチャンスに振り向きもせず、解放後も各地で、上に述べたように、病院に医師として勤務し、中学や大学で教鞭をとってきた。だが、韓 瑞穂はある時期から毛主席や共産党への疑問を抱くようになった。

1921年に上海で産声を上げた中国共産党は、1949年に政権を握ってからしばらくは、政策の多くは人民の支持と理解を得、人々に食とともに大きな希望を与えた。しかし共産党は次第

に驕り高ぶるようになり、人民の上に君臨して、偏狭な闘争や運動を性急に始め始めた。毛主席もその他の一部指導者も、革命の成功に高揚し、自分たちの理論と力を過信して、急激な社会主義化を迫り、絶え間ない闘争と運動を展開した。それは常に仮借なく進められ、しばしば人民に厳しい犠牲と過酷な運命を強いた。韓 瑞穂やその家族も例外ではなかった。1958年8月、韓 瑞穂は、南開大学日本語科の教師になった。

- (3) 1958年5月に、大躍進運動が開始された。1959年春には、大躍進運動の失敗は、はっきりと表れた。1959年夏、副首相兼国防相の彭 徳懐は、大躍進運動の弊害を明示し、毛 沢東に直言した。

彭 徳懐は当時60歳、5歳年長の毛 沢東とは同郷人（湖南省湘潭県出身）である。18歳で紅軍に参加して以来、毛 沢東と行動を共にし、国内解放戦争や抗日戦争で多大の功績を挙げた軍の英雄だった。朝鮮戦争では中国人民志願軍の初代総司令官を務め、1955年には10人の元帥の1人に選ばれた。質朴かつ豪放な性格で知られ、軍内での人望も極めて高かった。彼は郷里の湖南省はじめいくつかの地方で、大躍進運動の悲惨な現状を見聞きし、黙っていられなくなった。1959年7月2日から8月1日まで、廬山で政治局拡大会議が開かれた。彭 徳懐は毛 沢東に意見を具申するのを感じ、1959年7月13日の夜、7万字の意見書をまとめ、翌日私信の形で毛 沢東に送った。1959年8月2日から8月16日まで八中全会（中国共産党第8期中央委員会第8回総会）が開かれた。毛 沢東は彭 徳懐を「右傾機會主義者」として徹底的に批判し、解任した。

彭 徳懐は廬山会議の後、北京西郊の西苑付近の農村で労働と読書の日々を送っていたが、1965年9月、毛 沢東に招かれて中南海で面会、両者は和解し、毛 沢東の要請で、西南地区建設総指揮部副主任として、四川省に転動した。しかし1966年5月、文化大革命が始まると、再び受難する。彼は1966年暮れ、江青、林彪の意を受けた紅衛兵らによって、北京に連れ戻され、繰り返し批闘（批判・闘争）大会で、残酷な暴行を受けた末、病院の一室に幽閉された。彭 徳懐は監禁されたまま1974年11月29日に、76歳で死去した。しかもこの間、彼が希望し続けた毛 沢東、周 恩来らとの面会は許されなかった。そして、1978年12月に開かれた三中全会において、1959年の廬山会議での毛 沢東および党の誤まりが、やっと公式に認められた。彭 徳懐死去後、4年の歳月が過ぎていた。

- (4) 韓一家の受難は、反右傾闘争以後の1959年の秋に、夫の韓 向辰が階級異分子のレッテルを張られ、党内処分されてから始まった。1959年の廬山会議の後、全国で「反右傾機會主義」の整風運動が展開され、約10万の幹部が処分を受けた。「階級異分子」とは、プロレタリア階級の国家機関に潜り込んだ、ブルジョア階級分子という意味である。1960年の1月、夫の韓 向辰は思想改造のため、天津郊外の農村に下放された。

極度の物資不足は1962年末ごろまで続いた。誰もがその日の生活を維持するのに必死だった

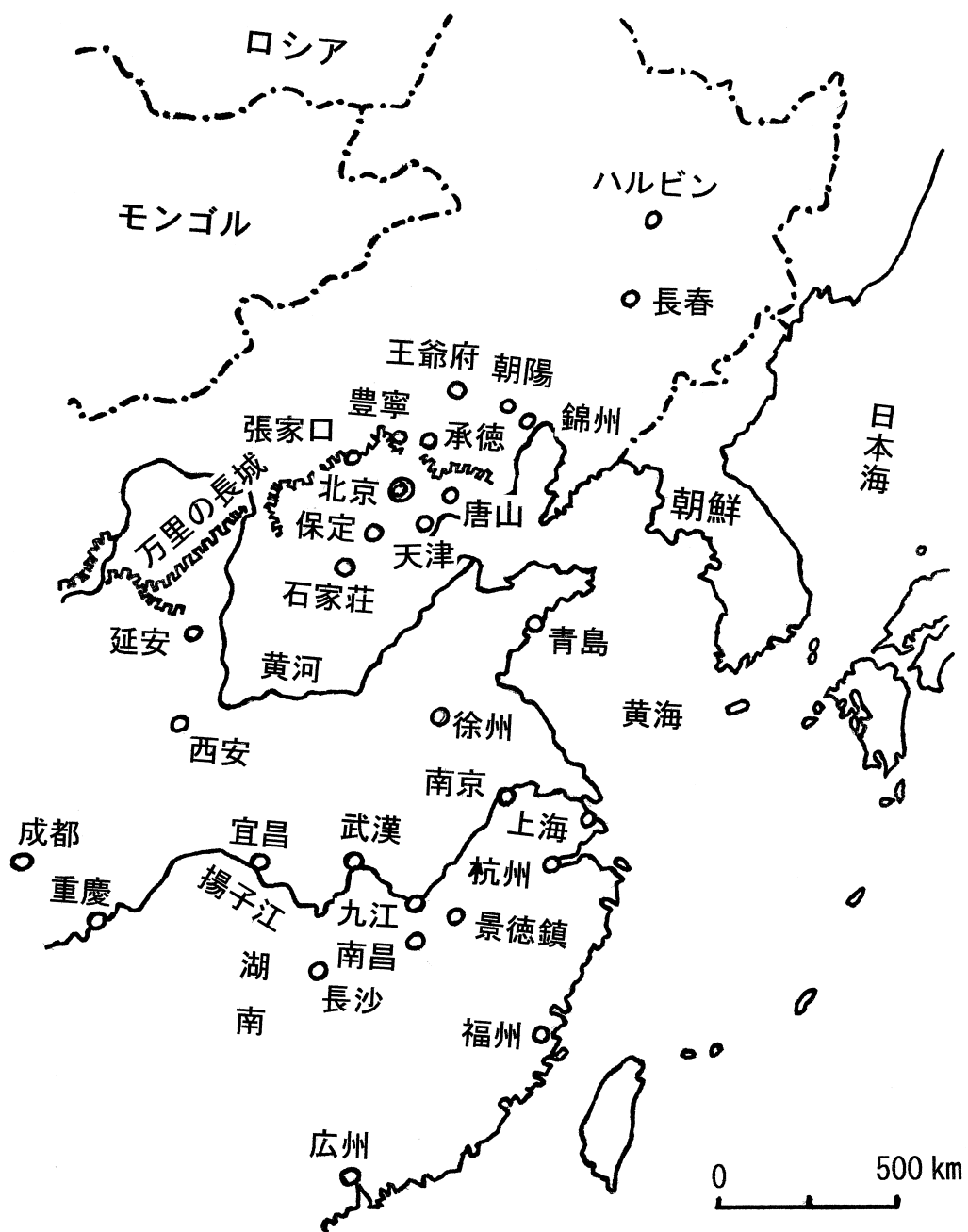


図3 中国

た。右傾機会主義批判は、いつの間にか立ち消えになった。大量の餓死者も出た。毛 沢東は、経済再建の任務を、劉 少奇、周 恩来、陳雲、鄧 小平、李 富春、李 先念ら実務指導者の集団指導にゆだね、彼らの決定に異議を唱えることはほとんどなくなった。

中国経済は1961年から、本格的な調整期に入り、大躍進は終息に向かった。何よりも食糧の増産が急務だった。「白ネコでも黒ネコでもネズミをとるネコはいいネコだ」と、鄧 小平が有名な言葉を言ったのもこの頃である。1963年にはいると、調整政策の効果は徐々に表れ始めた。1963年3月、下放中の夫が病気のために、南開大学の韓 瑞穂たちの宿に送られてきた。

1963年8月、韓一家は夫を含め、河北省承德地区の豊寧県に下放された。夫は、県政府文教局の職員として、嬉々として働きた。韓 瑞穂は豊寧中学の教師兼校医となった。長女は豊寧中学1年に、二女は豊寧の小学6年に編入された。

1964年も65年も、生活自体は平穩そのものだった。夫も韓 瑞穂も仕事は順調で、娘2人も土地の生活にすっかり慣れた。政府が経済調整策に転じて以来、中国全土の経済状況も著しく改善され、物資不足が解消されつつあった。国家主席の劉 少奇と党総書記の鄧 小平が主導した、現実的な政策が功を奏し、大躍進の後遺症が急速に克服された結果にほかならなかった。

しかし、1966年、中国全土は超特大の政治の嵐に突入していった。「10年の動乱」といわれたプロレタリア文化大革命の始まりであった。

- (5) 豊寧の豊寧県では、各中学校に紅衛兵組織が生まれ、連日街頭デモが行われた。1966年秋になると、授業はほとんどできない状態になった。当時中学生だった娘2人は、1966年11月中旬、他の仲間たちと連れ立って北京に行った。毛 沢東の接見にどうしても参加したいというのだ。

彼女たちは、11月26日に行われた最後の接見に、参加することができた。その日、彼女たちは、北京での宿泊所になった、市西部の地質省紅衛兵招待所を午前7時に出発、徒歩で天安門広場に向かった。3・40分で広場に着くと、すでに100万を超える紅衛兵たちで埋まっていた。その後も続々と、紅衛兵が到着した。氷点下の寒天の中で、紅衛兵たちは革命歌を歌い、毛語録を読み上げ、毛主席万歳を連呼して氣勢を上げ、むんむんとした熱気に包まれた。待つこと数時間、午後3時すぎに、毛 沢東は天安門樓上に姿を現し、群衆に向かって手を振った。耳をつんざくような歓呼の聲が上がる。毛 沢東は軍服に包んだ巨体を、揺るように樓から下りて、故宮の入り口にある金水橋まで歩き、そこからオープンカーに乗って、右手を振りながら、紅衛兵の前をゆっくり通り過ぎた。紅衛兵たちは熱狂し、毛語録を高く差し上げて、繰り返し絶叫する。

「毛主席万歳、万歳、万万歳！」

広場は興奮のつぼと化した。毛 沢東の顔を一目見ようと、群衆が押し合いへし合いする。感極まって泣き出したり、気絶したりする者が続出する。そうした中を、毛 沢東は笑みを浮かべながら手を振り、去って行った。その姿はまさに神の如くだったが、純真な子どもたちを

虜にし、彼らを大動員して政治目的に利用する術は、魔術師にも似ていた。古今東西、これほど完璧な人心掌握術に長けた、皇帝はいなかったろう。韓 瑞穂は娘 2 人の話をもとに、以上のように述べている。

北京では 1966 年夏以降、ほとんどの機関や学校で、造反派が指導者たちを、攻撃し始めていた。豊寧では 1967 年になって、攻撃が始まった。真っ先に攻撃の対象になったのは、豊寧県の党書記と県長であり、つづいて県の局長級が「走資派」として身柄を拘束され、「牛棚(牛小屋)」と呼ばれた狭い部屋に幽閉され、批闘大会でつるし上げられた。攻撃対象は急速に拡大し、あらゆる分野の指導的立場にあった、幹部が同様に捕えられ、自己批判と労働改造を迫られた。豊寧中学でも、校長はじめ指導幹部がまず攻撃され、やがて個々の教師にまで累が及んだ。その中で、最も残酷な仕打ちを受けた、生物教師のことが詳しく述べられている。校内の小部屋に幽閉され、毎日紅衛兵のひどい暴行を受け、食事も満足に与えられず、豚のえさを食べると強要された。遂に、神経を病み、夫と離婚、誰とも口をきかなくなったそうである。毛 沢東に支持された紅衛兵集団の暴力の前に、立ち足かえる人はいなかった。

1967 年 3 月に、韓 瑞穂は北京に行き、病床の義父を見舞うが、義父は病状が急速に悪化し、死去した。韓 瑞穂の二男正公もその頃、雲南省で死去した。

1968 年 3 月、15・6 人の紅衛兵が突然、韓 瑞穂の宿舎を襲撃した。夫は「日本の特務 (スパイ)、地主、資本家、党にもぐり込んだ階級異分子」として逮捕され、「牛棚」に閉じ込められた。夫は、県文教局の一職員で指導的立場になかったにもかかわらず、批闘大会が開かれると、欠かさず引っ張り出されてつるしあげられた。

1968 年 10 月、長女の正生が農村に下放された。正生は当時 18 歳、通常なら高級中学に進学していたはずだが、文革が始まって以来、学校は事実上機能を停止していたため、初級中学 3 年のままだった。長女は同じ中学の男女の同級生 7 人とともに、県北部の人民公社に行き、そこで 3 年余を過ごすことになった。その後、長女は県教育局によって、地元の中級教師に採用され、文革後、大学入試制度が復活すると、実力で師範大学に入学した。

1968 年 10 月下旬、韓 瑞穂も「臭い 9 番目 (知識分子)」として摘発され、県公安局の一間の部屋に隔離された。これと同時に夫は、「牛棚」から監獄に送られた。1969 年 4 月、瑞穂は、身柄を豊寧中学学生宿舎に移され、地下濠掘りの労働に従事した。1969 年 5 月にやっと拘束を解かれて、自宅に戻った。家には二女だけで、夫も長女もいなかった。当時 17 歳の二女は就業先もなく、時々、近くの山にたきぎを拾いに行ったりして暮らしていた。

1972 年 4 月中旬、夜 8 時、小さなボストンバッグに身の回り品を詰め込み、瑞穂は家を出た。ひそかに豊寧県外に出る唯一の方法は歩くことだった。夜明け前に山の反対側の里に出た。そこはもう豊寧県ではない。北京の最北部の農村地帯だった。午前 11 時前に北京駅に着いた。夫の末弟の家に辿り着き、翌朝から、夫の平反 (罪状を取り消し復権させること) を省革命委員会に訴える行動に移った。天津の革命委員会が動き、1972 年 8 月、夫は監獄から釈放された。しかし、「平反」ではなく、仮釈放であった。栄養失調で全身がむくみ、靴も履けず、裸

足で歩いて帰ってきた。3年余の獄中生活で、夫は10歳も老けたように見え、痩せこけた頬が哀れだった。夫が釈放された翌月（1972年9月）、日中国交正常化が発表された。夫の釈放もそれと無縁ではなかったと思われる。

- (6) 1965年11月10日付の上海の新聞「文匯報」に、姚文元は「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」という論文を発表した。これは、11月末の「人民日報」に転載された。姚文元は呉晗の脚本を、1959年の彭徳懐解任事件と結びつけて批判した。すなわち、「海瑞罷官」は、彭徳懐を海瑞になぞらえて称揚し、毛沢東を貶めることを狙った反動作品だ、と決めつけたのである。姚文元の論文は、劉少奇、鄧小平の調整政策を、資本主義路線と見なしていた毛沢東が、江青ら極左派と結託して主導権を奪回、再び極左路線に転じるために、周到に準備していた、反撃の狼煙にほかならなかった。

1966年5月、プロレタリア文化大革命（文革）が始まった。この時の政治局拡大会議では、新しい文革小組が発足した。そのなかには、江青、張春橋、姚文元という、後の「四人組」中、3人が加わり、以後毛沢東の手先になって「階級闘争」を操っていった。

1966年5月25日、北京大学に最初の大字報（壁新聞）が張り出され、北京大学と北京市党委員会を直接批判した。毛沢東の批准を経て、人民日報は66年6月2日、この大字報の全文を一面に大きく掲載した。これを合図に、中高校生や大学生を中心に、紅衛兵が登場し、あっという間に、「造反運動」が全国に広がった。紅衛兵たちは、江青、林彪、康生ら極左派に煽動され、群れを成して政府機関や学校、工場などを襲撃、「造反有理」「すべての権威を打倒せよ」と叫んで、指導者を攻撃し、「破四旧」のスローガンの下に、貴重な文物、史跡、寺院などを破壊しまくっていった。

1966年8月5日に、毛沢東は自ら「司令部を砲撃せよ - 私の大字報」を発表、「中央から地方まで一部の指導同志が、反動的ブルジョア階級の立場に立って、ブルジョア階級独裁を行い、プロレタリア階級の、熱気あふれる文化大革命を、打ち倒そうとしている」と煽り立てた。8月18日には天安門広場で行われた100万人の大衆集会に姿を見せ、紅衛兵を接見、紅衛兵の腕章を受け取り、自らの腕に着けた。このような天安門広場での紅衛兵との接見は、最後の11月26日まで計8回行われ、これに参加した紅衛兵は、延べ1,300万人を超えた。11月26日の様子は、前に述べたとおりである。

全国各地から、紅衛兵が陸続と北京に上ってきた。一方、北京の紅衛兵は、造反運動を広めるため、全国各地を回った。乗物はすべて無料であり、各機関や学校は、紅衛兵たちのために、宿泊施設や食事を提供した。全国の鉄道やバスは紅衛兵で溢れ、輸送力不足が深刻化し、生産活動に重大な影響を及ぼした。ほとんどの学校は授業を停止し、工場も操業できないところが続出した。

中央では多くの指導者が「走資派（資本主義の道を歩む実権派）」として迫害を受けた。とりわけ「中国のフルシチョフ」「走資派ナンバーワン」の汚名をかぶせられた劉少奇と夫人の

王光美への迫害はすさまじく、何度も屈辱的な暴行に遇った。劉少奇は1969年11月、河南省開封市の監禁先で、十分な手当ても受けないまま、71歳で死去したが、獄中にいた夫人を含め、その死を知る人はほとんどいなかった。劉少奇が名誉回復したのは、大変におそく、1980年2月のことであった。劉少奇死去後、10年の歳月が過ぎていた。

1967年末までに、毛沢東の奪権闘争はピークを超え、この過程で、毛沢東に次ぐ地位を得た、林彪はじめ江青ら極左派が、政治の前面に躍り出た。1968年10月には、党8期中央委第12回総会が開かれ、劉少奇国家主席の解任と、党からの永久除名処分を正式決定、毛沢東ら極左派の奪権闘争は終結した。こうした状況の中で、紅衛兵運動は用済みになり、むしろ秩序回復には邪魔になっていた。

1969年3月には、黒竜江省のウスリー江上の珍宝島（ダマンスキー島）で、中ソ両軍が武力衝突し、1960年ごろから、悪化の一途をたどっていた、中ソ対立は決定的な段階に入った。もともと中国共産党は、初期の社会主義建設は、ソ連の有償援助を受けながら、ソ連の経験をモデルにして進めた。しかし1956年のソ連共産党20回大会で、フルシチョフがスターリン批判をしたのを境に、徐々に対立が深まり、1960年にソ連は、すべての技術者を引き揚げ、援助を打ち切った。1963年からは両党間の公開論争に発展、国境地帯での小さな衝突事件が、頻発するようになった。文革の中では、「ソ連修正主義」は「アメリカ帝国主義」と並ぶ敵になったが、その帰結が珍宝島事件だった。珍宝島事件は毛沢東が後に、米国への接近を図る大きな動機になったといわれている。

1969年4月に第9回党大会が開かれ、林彪は主席の毛沢東の「後継者」となり、毛沢東に次ぐ副主席になった。そして、林彪の配下の軍人グループと、江青ら極左グループが大挙政治局入りし、文革一色の指導部が形成された。副主席林彪は野心をふくらませ、国家主席のポストを狙って画策した。毛沢東は林彪と夫人の葉群たちの野心を知り、1970年8月に9期中央委員会第2回総会（2中全会）で、林彪一味を批判した。林彪一味は、政治的に追い詰められ、毛沢東暗殺のクーデターを計画したが失敗した。林彪は葉群や息子の林立果らとともに、1971年9月に軍用機でソ連への逃亡を図り、その途中、モンゴルで墜死してしまった。

1970年秋以降、対外政策に目ざましい変化がおこり、西側諸国との関係が、次々に正常化された。1971年10月には国連代表権を回復し、1972年2月のニクソン訪中に続き、1972年9月には田中角栄首相が訪中し、日中関係が正常化された。一連の外交展開の中心を担ったのは周恩来総理だった。1973年春には、江西省の農村に下放されていた鄧小平が、副首相として復活した。

1973年8月の、中国共産党第10回大会では、林彪と同根の江青、張春橋、姚文元が政治局にとどまったほか、上海の造反派労働者出身の王洪文（38歳）が、党副主席に抜擢された。彼らは後に「四人組」と呼ばれた。その一方で、文革で破壊された経済などの再建と社会秩序を回復させるため、鄧小平はじめ多数の実務指導者が、中央委員に復活した。当時、毛沢東は階級闘争路線を継続しながら、国家再建を目指そうとしていた。



1975年1月の第4期全国人民代表大会第1回会議で、周恩来は政府活動報告をし、「4つの現代化」実現のスローガンを掲げた。周恩来は1976年に死去するが、彼に代って近代化政策を進めたのが、鄧小平だった。鄧小平は党副主席、第1副総理、党軍事委副主席、軍総参謀長など、党、政府、軍の中枢ポストに就いた。

しかし、1975年8月以降、毛沢東の四人組偏重が顕著となり、鄧小平を「生産第一主義」として直接批判していった。こうした毛沢東の矛盾した指導は、人民を混乱させ失望させた。

(7) 波乱の年 1976年は、中国人民の敬愛する周恩来総理の死去で始まった。

周恩来は膀胱にできた癌が全身に周り、1月8日午前、入院先の北京医院で78歳の生涯を閉じた。その死が9日未明に発表されると、人々は大きなショックを受け、深い悲しみに沈んだ。周総理は1972年以来、病に冒されていた。早期に総理の病気を知った江青ら四人組は、陰謀を巡らし治療行為を妨害したらしい。

周恩来の存在は、文革の狂気から脱し、近代的社会建設に向かう精神的支えだった。1976年1月11日、周恩来の遺体は、北京医院から八宝山革命公墓に送られ、荼毘に付されたが、その沿道には数10万の市民が列をなした。1月12日～14日の3日間、遺骨が安置された労働人民文化宮には、100万を超える市民が訪れた。

1月15日の追悼大会は、北京の人民大会堂で盛大に挙行された。会場に入れない数万の市民が詰めかけた。追悼大会には、四人組を含め党・政府・軍の指導者のほとんどが参列したが、そのなかに、葬儀委員長の毛沢東の姿はなかった。

追悼大会で党・政府を代表し弔辞を述べたのは、鄧小平だった。鄧小平は追悼大会を最後に、事実上失脚してしまう。1976年2月になると、総理代行に政治局員の華国鋒が就任した。

1976年4月5日、いわゆる第1次天安門事件が発生した。前日の4月4日の清明節には、天安門広場は数10万人の市民で埋まった。市民らは周恩来追悼の形を取りながら、四人組とその極左路線への異議申し立てを行った。市民らは、英雄記念碑の周囲に多数のピラや小字報を張りつけ、抗議の意思を表した。しかし、翌5日早朝、広場に行った市民は、花輪もピラもすべてなくなっているのに気づいた。天安門広場は朝から騒然となった。公安の車を焼き打ちしたり、警備員を暴行したりした。当局は夕刻になって弾圧に出た。午後9時ごろ、照明弾が打ち上げられ、広場は昼間のように明るくなった。それを合図にして、数千の民兵や武装警察隊員らが、広場に残っていた数100人の市民を包囲、こん棒でめった打ちにしなが、全員を逮捕した。

第1次天安門事件では発砲はなく、その場で死者も出なかったが、大量の血が流れ、後日死亡したり、重度の身体障害者になったりした人は少なくなかった。この事件の特異性は、中国解放後初めて、毛沢東率いる党中央に、人民が公然と反抗しただけでなく、それを党が力で鎮圧したことにあった。

党中央は4月7日、天安門での民衆の行動を「反革命的な事件」と断じ、鄧小平がその黒幕

だったと決めつけた。毛沢東の指示に基づいて、鄧小平をすべての職務から解任すると同時に、総理代行の華国鋒を、総理と党第1副主席に就けた。

1976年7月6日、軍の元老である「総司令」朱徳元帥が死去した。ひきつづいて、7月28日未明には、河北省唐山市を直下型の激震が襲い、100万都市の唐山は一瞬のうちに壊滅、24万2000余の死者が出た。中国では古来、天変地異は皇帝の交代など、政治変動の予兆との言い伝えがある。そして1ヶ月後の9月9日未明、毛沢東が死去した。82歳だった。

毛沢東は、自分の死後への備えは、ほとんどしていなかった。最高権力と神格性を堅持、自分の命令が末端まで行き渡り、全人民がそれに従うような、全体主義の政治体制を変えようとはしなかった。後継者が未定のまま、毛沢東は死去した。人々が不安を募らせたのは、単に毛沢東が不在になったというだけでなく、天安門事件後、ますます大きな権力を振るっていた、四人組が後継権力を握るのではないかと考えたからだった。

毛沢東の死後、四人組と反四人組の間で、激しい権力闘争が繰りひろげられた。反四人組は、葉劍英ら党・軍の長老たちであり、華国鋒を主席に推した。四人組は江青を主席に推した。1976年10月6日夜、華国鋒グループは、四人組とその配下を一斉に逮捕した。権力闘争は決着し、華国鋒が新しい主席に就任した。

このことが党の末端組織に通達されたのは、10月18日だった。あっという間に、この吉報は全国に広がった。四人組打倒を祝い、華国鋒の主席就任を支持するデモが各地で始まり、10月21日には、北京で100万人の祝賀デモが行われた。10月24日に、天安門広場で四人組粉碎祝賀の100万人集会が開かれた。しかし、鄧小平への批判継続は従来のものであった。華国鋒体制は、成立の直後から、極左路線の失敗の責任を、すべて四人組一派にかぶせることで、毛沢東の権威を守ろうとしていた。

1977年7月の三中全会（党10期中央委員会第3回総会）で、華国鋒は鄧小平の名誉回復を受け入れ、鄧小平はすべての職務に復帰した。

1978年4月、党中央は1957年の反右派闘争で、右派のレッテルを張られた人々の名誉回復を決定し、同年11月までに、すべての右派分子の名誉は回復された。1978年5月の「光明日報」に、毛沢東の無謬性を否定する論文が発表された。それは、鄧小平とその腹心の胡耀邦の指導の下で書かれた論文であった。絶対的なタブーになっていた毛沢東批判の突破口が開かれた。

1978年12月の三中全会（党11期中央委員会第3回総会）は、天安門事件の評価を、「反革命」から「革命行動」へと180度転換した。この総会は、鄧小平派の全面的勝利に終わった。これを機に、鄧小平は中国の最高指導権を事実上握り、華国鋒体制の崩壊が始まった。1981年6月に、華国鋒は主席の座を追われ、胡耀邦が主席の座についた。

なお、華国鋒は失脚後も、首相経験者の待遇を受けていたが、1997年の第15期中央委員会第1回全体会議後は、この待遇も取り消された。華国鋒は2001年9月中旬、健康上の理由で離党届を提出した。党書記局が、離党を話し合うために、10月中旬に開いた特別会議では、

華氏は「現在の共産党と以前の国民党の何が違うのか」などと党の腐敗に強い憤りを示したという。

- (8) 夫の韓 向辰は、1976年頃、毎日熱心に人民日報などの刊行物を読み、中央の政治動向を正確に読み取っていた。夫の頭にあるのは、自分にかけてきた罪状を晴らし、名誉を回復することであり、上部機関に名誉回復の審査を求める訴状を提出する機会をうかがっていた。しかし当時夫は、ますます極左派がのさばりつつあると判断し、名誉回復の時期は遠のくばかりだと嘆いていた。

1976年4月、韓 瑞穂にまた転機が訪れた。河北省と天津市からの指示によって、豊寧中学から承德市立病院に転勤することになった。市立病院は耳鼻咽喉科の医師を求めており、瑞穂に白羽の矢が立ったのである。承德には二女だけが同行し、夫は一人豊寧に残った。

1978年12月に、夫の韓 向辰は天津に呼ばれ、彼にかけていた一切の嫌疑は冤罪だったと告げられた。瑞穂はそれを夫からの電報で知った。喜びに体が震え、涙が止まらなかった。この20年近く、韓一家がづらい思いをしてきた最大の問題が解決したのである。

天津市が韓一家に与えた「補償」は、元の職場への復帰だった。つまり向辰は天津医科大学、瑞穂は南開大学へそれぞれ戻ることを許すというのである。韓夫妻は下見のつもりで天津に行き、医科大学、南開大学をそれぞれ訪問した。どちらの校内も荒れ果てていた。狂気と暴力の痕跡しか見ることができなかった。韓夫妻は天津への職場復帰を断り、承德に戻った。

1979年3月、北京から2人の男性が、瑞穂を訪ねてきた。国際関係学院の大学院で、日本文学の教師を探しており、瑞穂を迎えたいと言った。学院側は、瑞穂と一緒に向辰も招き、学院党委員会の一員になってほしいと提示してきた。

1979年9月に新学期が始まると、瑞穂は5人の大学院生に週2回、日本文学史と文章創作の講義をする一方、学部4年生にも、週1回2時間、文学史の講義をした。講義の合間を縫って、和歌を詠み重ねた。

韓 向辰は国際関係学院日本語学部の学部長兼党委員会書記に就き、生き生きと働きだした。夫婦そろっての仕事に満足し、一緒に生活を楽しめるようになったのは、結婚以来初めてといてよかった。

- (9) 鄧 小平は、社会主義の政治体制を維持したまま、資本主義の市場原理と外国資本を導入し、経済体制の変革と対外経済関係の強化によって、高度成長と人民の生活向上を実現した。それは毛 沢東の思想や路線の大胆な否定であっただけでなく、伝統的なマルクス・レーニン主義の理論の大きな突破であった。

対外開放が進むにつれ、外国の正反両面の影響が社会に生じ、西側先進国の制度、文化や価値観へ傾斜していく世代と、その思想面を含め毛 沢東遺制から脱することが出来ない世代との矛盾は、1980年代にだんだん先鋭化していった。その矛盾が集中的に現われたのが、1989

年 6 月の第 2 次天安門事件だった。

1982 年 9 月に主席制は廃止され、トップの肩書きは総書記となった。胡 耀邦が総書記の座にあった時、経済発展と同時に、民主化への努力が重ねられ、中国社会は大いに活性化した。改革開放の進展につれ、社会には拝金主義やモラルの低下、犯罪の増加、所得格差の拡大などの矛盾や問題が現れた。老幹部を中心とした保守派は、1986 年秋、ブルジョア自由主義を抑圧するよう主張した。これに反発した学生達は、街頭抗議デモを各地で展開した。1987 年 1 月、胡 耀邦は総書記のポストから解任された。保守派と妥協したかにもえた鄧 小平は、胡 耀邦の後任に、ある意味では胡 耀邦以上に大胆な改革主義者の趙 紫陽を指名した。

趙 紫陽は性急に市場経済化を進めた。政治・行政体制の改革が進まない中で、価格の自由化を行ったので、物資・原材料の分配権を握る官僚組織が、市場への供出を制限したりして、価格をつり上げ、不当な利益をあげた。

1988 年夏には、極度の物不足からインフレが深刻化、社会不安が募った。趙 紫陽は経済政策失敗の責任を問われ、急速に実権を失っていった。党中央は経済・社会の安定回復が急務として、経済を引き締める調整策と同時に、治安の強化や言論の統制を始めた。

1989 年 4 月 15 日、胡 耀邦が急死した。死因は心臓発作だったが、学生たちの間では、保守派の攻撃にさらされた末に、死に追いやられたとの風評が立ち、騒然となった。4 月 17 日からは、胡 耀邦追悼を名目にした天安門広場へのデモが始まった。

学生たちは民主化や政治改革を求め、官僚の特権・腐敗に反対するスローガンを掲げ、共産党政府への対決姿勢を強めた。周 恩来追悼を名目に始まった、第 1 次天安門広場事件（1976 年）前の、民衆の行動を想起させる動きだった。しかし、当時との決定的違いは、学生デモに対する社会の支持が広範で、一部政府機関を含め、ほとんどの単位がデモに参加しただけでなく、党中央内の意見が分裂し、政府が収拾能力を失ったことだった。

政府側は憂慮と焦燥を深めていた。5 月 15 日から、ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の訪中を控えていたからだ。中国側は書記長を最大級の待遇で歓迎する準備をしてきたが、歓迎式典の会場となる天安門広場は、学生に占拠されてしまった。

5 月 15 日午後、ゴルバチョフは混乱の北京に到着した。中国政府は急きょ予定を変更、北京空港で慌ただしく歓迎式典を行った。5 月 16 日の鄧 小平、李鵬、趙 紫陽との会談も、人民大会堂ではなく、ゴルバチョフの宿舎である、釣魚台の迎賓館で行わざるを得なかった。これだけでも、中国指導部は面子と威信を失ったが、5 月 17 日・18 日両日には、北京で 100 万を越える大デモが繰り上げられ、反政府デモは全土に拡大、党中央は重大な決断を迫られた。そして、5 月 20 日、北京に戒厳令が布告され、戒厳部隊が市周辺各所に配置された。

6 月 3 日夕から、命令を受けた戒厳部隊は実力行使を開始、学生、市民の抵抗を押さえて、6 月 4 日未明には天安門広場に達し、広場から学生を撤収させた。事件後、趙 紫陽は総書記を解任され、後任には、政治局員兼上海市党委員会書記の江 沢民が、鄧 小平によって抜擢された。この事件では、約 300 の人命が失われた。第 2 次天安門事件は、解放軍が直接人民に発砲

した惨事であった。

韓 瑞穂は次のように述べている。「解放軍が直接人民に発砲した惨事ではあったが、非常に複雑な国内的、国際的背景があり、主権国家としては、やむにやまれぬ選択だったことも事実だった。事件後、私は学生たちと何度も、この問題で議論した。私は学生たちが、民主化と社会正義を求める純粋な気持ちから、行動を起こしたことを、完全に理解している。しかし、そうした学生たちを、政治目的に利用しようとした、国内外の勢力がいたことも、否定できなかった。民主化ひとつとっても、この国に西側並みの基準を持ち込み、適用するのは時期尚早であり、さらに長い年月をかけて、条件を整えていかなばならないだろう。」と。

第2次天安門事件は、鄧小平はじめ中国の指導者にも、大きな教訓になったことは間違いない。事件に対する国際社会の反発は、予想以上に大きかった。中国は一時的にせよ、国際的に孤立に陥った。1989年11月には、鄧小平が中央軍事委主席を辞任し、後任には江沢民が就いた。1990年1月になって、北京の戒厳令は解除された。1991年5月、江青は獄中で自殺した。

第2次天安門事件後、保守派の発言力が強まって改革開放の前途が危うくなった。改革開放の危機を救ったのは、鄧小平だった。彼は1992年1月に南方を視察して、各地で講話を公表、大胆に市場経済を発展させるよう号令をかけ、これを機に改革開放が再び活性化した。それによって中国経済は、世界を驚かせるほどの、高度成長の軌道に復した。鄧小平の政策が、民意を反映していたことを、物語っている。

鄧小平は1997年2月、92歳で波乱に満ちた一生を閉じた。毛沢東は中国解放という「第1の革命」をやリ、鄧小平は中華振興という「第2の革命」をやった、といわれる。

鄧小平は、毛沢東以後の中国を率い、改革開放を進めて、中国に驚異的な経済発展をもたらした、「最高指導者」の名をほしいままにしたが、中国人民は彼の死を、極めて平静に受けとめた。これには3つの理由が考えられる。

第1は、鄧小平は優れた指導力を発揮し、カリスマ性も備えてはいたが、神格性はなく、いわば「偉大な凡人」だった。

第2は、経済体制や社会構造の変化に伴い、人々は指導者の命令で動くのではなく、自らの創意や行動力で人生を切りひらくようになった。

第3は、鄧小平は早くから自分の死後に備え、現在の江沢民を中心とする後継体制の確立に努め、死の半年前には、すべての公職から引退していた。

- (10) 中華人民共和国は、1999年10月1日、建国50周年を迎えた。韓瑞穂は夫の韓向辰との間に、二男二女をもうけた。韓瑞穂の知らない間に、他人の養子に出された二男は、文革中に不遇の死を遂げたが、その他の3人は立派に成人して結婚した。韓瑞穂には4人の孫がいる。文革前に家族から離れ、解放軍に入った長男は、その後復員して結婚、一男一女をもうけ、現在は北京からそう遠くない涿州市の中学校の教務主任を務めている。農村に下放された長女

は、1977 年に復活した第 1 回全国統一大学入試に合格した後、1980 年代初めに日本の大学に留学した。卒業後、職を得て日本に残り、結婚して一女をもうけた。文革中に労働者になった二女は、その後、漢方医学を学び、北京市海淀区にある漢方医院で、骨質増生の専門医として働いている。二女も一児の母である。

韓 瑞穂が心を痛めているのは夫のことである。中国解放後の 1950 年代以降、主として毛沢東の評価をめぐる、夫婦の間に溝が出来た。夫は、日本留学当時から、毛沢東と共産党は、封建中国の救世主と信じ、どんなに自分がひどい目に遭っても、その信念は変えなかった。韓 瑞穂は、夫が度々、不当な理由で迫害され、自分達家族にもその影響が及んだ時、毛沢東の極左主義に根源があると思に至り、極左主義を憎むようになった。

1978 年 12 月に、夫が名誉回復され、夫婦と一緒に国際関係学院に奉職してから、夫婦の矛盾は大きく緩和された。夫婦の関係は、円満そのものの状態が 10 年以上続いた。1993 年の金婚式の時は、子どもや孫に囲まれ、お互いに生きていて良かったと実感したのだった。

1996 年秋、75 歳になった夫は、脳内出血で倒れた。半身が不自由になり、寝たり起きたりの生活をしている。夫は偏屈になり、怒りっぽくなった。それは単に病気のためだけとは思えない。

50 年前に革命を成就し、封建社会の呪縛から解放された中国は、現在まだ、経済的基礎を築くのに没頭している段階にある。経済建設第一の政策が生む矛盾や問題も多い。拝金主義がはびこり、不正や犯罪が横行し、失業者も増えて、社会不安が募っている。人間の尊厳や品格が失われてゆく。

夫が荒れることにも、少しは同情する気になる。夫が信じた毛沢東時代と現状との距離は限りなく大きい。夫は、中国人は金のために、自尊心も品性もなくしたのか、といらだっているように思える。

## 5. あとがき

本稿は、朝鮮・満州・中国についての、私の学習ノートである。

朝鮮については、主として、幕末から朝鮮戦争の停戦協定成立（1953 年）までの期間について述べた。満州については、主として、幕末から終戦（1945 年）までの期間について述べた。中国については、主として、終戦直前（1944 年）から鄧小平の死去（1997 年）までの期間について述べた。勿論、日中戦争は重い課題であるが、これについては本稿では触れていない。学習ノートが出来ていないからである。

日本と朝鮮・中国（満州をふくめて）は大変に近い隣国である。しかし、私は自分の学習ノートを作りながら、知らないことの多さに驚いた。

2001年8月6日の朝日歌壇に、私の一首が採歌された。

過去を知り 歴史の真実 見きわめる  
洞察力を みずからに問う

(近藤芳美選)

この一首は、私の学習ノート作製の過程で生み出されたものである。

この一首には後日談がある。「選択」という月刊誌に、朝日新聞編集委員の河谷史夫氏は、「本に会う」という連載をつづけている。2001年9月号の「選択」に、河谷氏は次のように書いている。

「生来無粋で、侘びだの寂びだの湿り気の具合は知ったことではないし、風流にも御縁はないから、575にも57577にも付き合いはない。それでもときに、ひっくり返って新聞の短歌俳句欄を眺めることがある。いつかこんな歌が載っていた。」

そして、次に、私の一首が登場し、つづけて「どんな人なんだろうと思った。戦争に翻弄された経験をお持ちなのか。それとも若い作者であろうか。今の若い者が『洞察力』などという言葉を使うかしらん、と見知らぬ人生をあれこれ想像してみる。」と。

「選択」という月刊誌は直販の雑誌であり、普通の書店には並んでいない。しかし、かなりの人々が読んでいるらしい。熊本在住の中学時代の友人と、名古屋在住の地質学の先輩から、「選択」の9月号のコピーが送られてきた。私はびっくりして、すぐ朝日新聞の河谷氏にお便りした。そしたら、「選択」の10月号に、河谷氏は次のように書いた。

「前号に新聞への投稿歌を引いた諏訪兼位という人の作をまた見た。『寝返りもかなわざりしよ特攻の 三角兵舎の出撃前夜』(2001.8.27.朝日歌壇)。選者の佐佐木幸綱が短評に記す。『半地下、木造バラック建ての知覧基地の狭い兵舎、との注記があった。半世紀を経ても伝わる緊迫感』

特攻隊要員だったかと想像していたところに、思いがけなく手紙をいただいた。…先の戦では中学4年の学徒動員で基地の建設に従ったそうである。『戦争に翻弄された経験を持つ1928年生まれです』とあった。」と。

この10月号のコピーは、尼ヶ崎在住の幼な友達から送られてきた。私は再びおどろいた。

また、本稿執筆中の2001年9月11日に、アメリカにおいて同時多発テロがおこった。主要先進国は、テロ根絶にむけて本格的に取り組む必要がある。それは決して軍事作戦を行うことではない。政治的、経済的、外交的英知を傾けた、平和的な取り組みこそが、もっとも肝要である。

私は、次の二首を朝日歌壇に寄せ、採歌された。いずれも、私の気持ちを率直に詠んだものである。

憎しみが 憎しみを呼ぶ 世となるや  
平和力いま 験 (ため) さるる時

(2001.10.8. 島田修二選)

日本人の 不戦の誓い 崩るるや  
かの開戦の 前に似し現在 (いま)

(2001.11.5. 島田修二選)

本稿の朝鮮・満州・中国についての、私の学習ノートをお読みいただき、これらの隣国についての、皆さんの理解が、一層深まることを願ってやまない。

本稿を終るにあたり、原稿作製に御協力いただいた、日本福祉大学総長・学長室の浅野憲史氏、鈴木直美さん、小笠原則子さんに厚く御礼申しあげる。

## 6. 引用文献 (ABC 順)

- 梶村秀樹 (1977) : 新書東洋史 10 「朝鮮史 その発展」.  
講談社現代新書 460, pp.238, 1977.10.20.  
(2000.12.25., 第 37 刷).
- 韓 瑞穂 (2000) : 異境 --- 私が生き抜いた中国 ---  
新潮社, pp.335, 2000.3.15.
- 河谷史夫 (2001a) : 本に会う (連載 21) リーダーの「器量」  
「選択」(直販月刊誌), 2001 年 9 月号, p.116-117.
- 河谷史夫 (2001b) : 本に会う (連載 22) 特攻兵の沈黙.  
「選択」, 2001 年 10 月号, p.116-117.
- 国分良成 (2001) : 世界の中で自己相対化を --- 靖国参拝で悪化 日韓・日中関係 ---  
朝日新聞, 2001.8.21.
- 小菅幸一 (2001) : 記者は考える --- 韓国の思いに耳すませ ---  
朝日新聞, 2001.7.16.
- 松永信雄 (2001) : 日韓教科書摩擦 --- 韓国の「痛み」に理解を ---  
朝日新聞, 2001.7.27.
- 中塚 明 (1992) : 『蹇蹇録』の世界.  
みすず書房, pp.297, 1992.3.20.
- 中塚 明 (1993) : 近代日本の朝鮮認識.  
研文選書 52, pp.252, 1993.2.5.



坂本龍彦 (1998) : 孫に語り伝える「満州」.

岩波ジュニア新書 296, pp.220, 1998.1.20.

高崎宗司 (1993) : 「反日感情」韓国・朝鮮人と日本人.

講談社現代新書 1158, pp.217, 1993.8.20.

(1997.11.25., 第9刷).